
逃走者！！

夷 神酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走者！！

【Nコード】

N2621C

【作者名】

夷 神酒

【あらすじ】

「僕、幼馴染みに追われてるんです…」逃げ足の速さが取り柄の男子高校生と、それを追う幼馴染みの女の子の、初短期連載コメディー！お暇な時間にどうぞ・・・この話は、『作者が暴力女に追い掛けられて足が速くなった事実』+『作者のくだらない発想』×『友人の助言』÷『読者の気分』で出来ています。10/21に全体的に修正を施しました

1、朝から逃走中（前書き）

私、夷 神酒の初連載です。読みにくい部分もあるでしょうが、寛大な心でお許しくださいm(_____)m

1、朝から逃走中

おはよう諸君。

…って慣れない挨拶は置いて、この前入学式を終え、無事高校生になった僕は、早速生命の危機に立たされている。

時間帯は朝方の登校中。

現在地は普通の通学路の途中。

周りには車もないし、今は銃刀法違反者もない。

テポドンも飛んできてないはずだ。

…えっ、『なにが生命の危機だ？ 被害妄想しすぎだクソ野郎』だ
って？

ふっ、確かに妄想かもしれない。

むしろ、妄想でこの現実が終わってほしい

けど、それは後ろから確実に迫っていた…

「こらあカケル！！ 待てエエエエエ！！」

そう僕、伊達駆「だて カケル」は追われてるんです。

だけど、僕はヤクザにも警察にもパラッチにも追われる筋合いはない。

「止まれえ！！ 止まらないと三枚に下ろすわよ！！」

聞き慣れた透き通る声。

そこから読み取れる悪意。

そして、後ろから迫ってくる殺気…

…これは僕の天敵、四谷彩貴「よつや サキ」ですね。

彼女は小学生の頃から、僕にいちやもん付けて、襲い掛かってくる
要注意危険人物だ。

この殺気をどんな顔で出しているのか見てみたい。

しかし、今後ろを振り返れば失速して、即三枚下ろしの後、叩きに
される。

「だから止まれえ！！ 袋叩きにするよ！！」
ほらね、ビンゴ。

逃げ続けてる間に、目の前に我が高校の正門が見えてきた。
そして、あの中には彼女の追跡に対して完全無欠、絶対防衛を誇る
一室が存在する。

その名は…男子トイレである！！

僕は一直線に正門に走り込む。

そして、グラウンドを突っ切って昇降口に……………！？

「伊達！ ここは通さん！！」

グラウンドの途中には、体格のいい男子生徒が数人が立ちはだかつ

ていて、その中心にクラスメイトでありラグビー部エース、田中がいた。

「四谷親衛隊の名にかけて、逃走はここで諦めてもらう」

サキは容姿端麗、成績優秀なこともあり、男女から結構好感を得てる（一部を除く）ためファンクラブや親衛隊が、入学一週間もかからず出来ていた。

「チイツ…来たか!!」

そんなこんなで立ち止まっていたら、後ろから強烈な殺気と共に、ダースベイダーのテーマの幻聴が…

「やっと追いついたわ…」

振り返る必要はない。

しかし、これで挟み撃ちされた。ライフカードは三枚。

- ・ 中学の頃から『県内最強のラインバック』の田中に勝負を挑む。
- ・ 昔から勝率ゼロ%の鬼神、サキに勝負を挑む。
- ・ 人生を諦める。

どうする?? どうするよ、俺!??

…つて二枚目は三枚目と結果は変わらないな。
…なら、僕が生き残る道はただ一つ！

「田中ア！ 退けえええ！！」

迷ってる暇はない、突貫するのみ！！

「来るか！ 四谷親衛隊No.124。田中、参る！！」

ここに、僕と田中の譲れない戦いの火蓋が切って落とされた。

2、授業中に逃走願望

「おいカケル。生きとるか？」

「…なんとか存在出来ている」

僕は教室の自分の席に無事到着することに成功。でも、田中との一騎打ちは見事惨敗。

もうすこしで僕が緑色に光って『光速の世界』を感じられたのに…

「…心が少年のマンガが好きか、水曜日の夕方七時にアニメ見とる人しかわからんネタ持ち出すな」

…気にするな！ とにかく僕は一度捕まった。

だけど、田中が隙を見せた瞬間に全速力で逃げ出す事が出来た。

で、今この机に俯せてるんです。

「まあ色々あったみたいやけど、よおあん中から逃げ出せたな。俺やったら100%無理やな」

先程から、突っ込みを入れながら目の前で話している小野田光「おのだ ヒカル」は愉快そうに笑っていた。

彼は短く刈り込んだ茶髪が特徴的で、同じ小学校で中学で別れたのだが高校で再会した、馴染みの友達の一人だ。

こいつの笑顔は老若男女に好感を持たれる必殺的な技で、ある意味凶器である。

「…見てたんなら助けてくれ」
「スマンスマン、つい見とるのがおもしろくてな」
…とてつもなく殴りたい！
が、僕の善意がヒカルの無邪気な笑顔を殴る事を許さなかった。

ヒカルは僕の葛藤も知らずに喋りだす。

「それにしてもカケル、昔はメツチャ駆け足遅かったのになんでそんなに早くなつたん？」

そう、昔はヒカルよりもよっぽど遅かった。

でも、今は勝てる自身がある。

「お前は知らぬだろうが、カケルは中学でも酷い目に遭っていた。それ故だ」

いきなり会話に割り込んできた聞き慣れた声を聞いて、僕は振り返りざまに声をかける。

「レイ、いきなり人の背後に表れるな、気味悪い」

「すまぬ、いつもの癖が出てしまった」

メガネを掛けたツンツン頭の和泉玲「いずみ レイ」がそこにいた。

彼は小中高すべて一緒の腐れ縁であり。また、僕とサキの戦い（一方的）の歴史を見てきた数少ない友人でもある。

人の背後をとるのが癖という、暗殺者的なちょっと危ない所もある。

「酷い目つちゆうのはなに？」

僕の中学時代を知らないヒカルは、興味深そうにレイの話に耳を傾ける。

レイは僕の隣、自分の席に座ってヒカルの知らない僕の過去を話始

めた。

「小学校の頃から始まった、カケルに対するサキの攻撃は中学入学時ぐらいから酷くなり、その頃からカケルは生きる為に逃げ足が早くなっていた」

ああ、その頃の話を読されると今でも泣きたくなくなってくるよ……

レイはメガネのブリッジを上げながら、再び口を開く。

「まさに狩るもの、狩られるもの関係だった。しかし、あれからサキの攻撃はある程度緩和されている」

そうそう、あの頃は追い掛けられてる時は本当に狩られると思ったよ。

出来ることなら緩和じゃなくて、今すぐ完全に止めてほしい。

ヒカルは僕の小学校の頃を知っているため、その話に納得したようだ。

いや、ちょっと否定してほしかった……

僕の思いを知らないまま、ヒカルはレイを質問攻めにする。

「大変やったんやなあ。で、『あれ』ってなんのことや?」

「ああ、それはな……」

レイが話そうとした時、サキとは違う殺気を感じた。

その瞬間、僕らの頭に何かが振り下ろされた。

「イッテッ！」 僕

「ヴファ!?」 ヒカル

「……………ッ！」 レイ

僕は二人が悶えている中、僕らにこの痛みを与えた人物を見上げた。

それは鬼の形相で、危険な鈍器を手にしていた。

「ゴラア！ 授業中になにベラベラ喋ってんだ！」

……………目の前には国語教師の田口さんが分厚い漢字辞書を持って立っていました。

「……………スイマセン……………」

クラスメイトが笑いを堪える教室、僕はここから今すぐ逃げ出したかった……………

2、授業中に逃走願望（後書き）

この小説の主人公は親（作者）に似て相当ヘタレですので、短い間ですがそのヘタレっぷりに呆れてください。

3、昼は安全地帯へ逃避（前書き）

この作者は必要とあれば、主人公をにも容赦はしません

3、昼は安全地帯へ逃避

僕、伊達 駆は走っています。

そりゃもう全力で。

『廊下を走るな!』というポスターなんて、見てない見てない! そんなもの気にしてたら…って早速殺気!

チユン

「危なっ!!!」

間一髪、立ち止まったおかげで『あれ』に当たらずにすんだ。

右を向くと窓ガラスに小さな穴、左を向くとコンクリの壁にも穴、そしてコンクリに埋まってるのは『あれ』という名の7・62ミリ口径の鉛玉

アハハ、ここってどこの紛争地帯だっけ…

僕は田口さんの『必殺・広辞苑の「大当たり」の次の項目は「大穴」「チョップ(僕&ヒカル命名)』を受けた後は、何の問題もなく午前の授業を寝てツ…しっかり授業を受けていた僕は、昼休みに突入していた。

ああ、食べるにくい。

ただ弁当を食べるだけなのに、箸に挟まれた卵焼きに穴が開きそうなほどの目線が注がれる。

ああ、とてつもなく食べにくい。
その目線の持ち主、ヒカルの潤んだ瞳が僕に訴えかけて来るんだもの。

威力は某金融業者のCMのチワワ並に殺人的だ。

「お前、今日の昼飯は？」

「……これ」

ヒカルの手にはカラになった『10秒メシ』のゼリーがあった。
食べ盛りの高校生には足りないよなあ。

レイは購買に行ってるしなあ。しょうがないなあ。

「………食べる？」

「……いいん？」

「うん、僕少食だから」

「マジで!! ありがとう!!」

その言葉を待っていたかのように、ヒカルは早業で僕の箸から卵焼きをパクリと食べた。

「……うわっ、メツチャ美味い! こんな美味しい卵焼き今まで食ったことないわあ! さすがカケル、料理上手いなあ」

さっきまでの悲しそうな表情が、天使のほほ笑みに変わった。

んん、こいつの笑顔はいつみてもいいなあ。

僕はこの笑顔でお腹いっぱいだよ。

でも……

「ほめてくれるのは嬉しいけど、自分で箸持って食べよ。クラスメイトにBしたとかオカマだとか、噂されるのはお互い嫌でしょ?」
正直クラスメイトの目線が「僕がヒカルに手作り弁当を食べさせて

る』という勘違いを含んでいた。
痛いくらいに…

「分かった」

そういうと、ヒカルは右手を出してくる。

完全にご機嫌になっているヒカルに僕は箸をわた…

パンツ

あらら

なんかいきなりお箸が短くなった気がするなあ。か、確実に砕け散
ってるねえ、うん

「なあカケル、これって…？」

目の前で起こったことに目を丸くするヒカルに、僕はいざという時
の予備の割り箸を渡す。

「ああ、ずいぶん腕を上げたみたいだね」

そして僕は廊下側の窓の先を見る。

「鬼ごつこの次は射的ですか？ 場所を考えてほしいな、生徒会長
？」

僕の目線の先には隣の北棟の屋上があり、そこには「スナイパーカ
ヤ・ビントブカ・ドラグノフ」、通称SVDを構えたサキがいた。
あ！ 忘れてたけど、彼女はこの戌神高等学校の生徒会長をやっ
てる。

ついでに僕とレイとは腐れ縁の部類に入る生徒会長様だ。

一年生の生徒会長なんて有り得ないけど、目の前にいるんだからし
ようがない。

「てか、作者あ！ 学校名とか諸々の細かい設定をここで説明させ

るなよ！ 付け焼き刃なのがバレバレ…！」
バキューン

殺気を感じた僕は、なんとか横に跳んだおかげで、ふざけた効果音の凶弾を避けられた。

「この作者、機嫌損ねると主人公でも殺す気やから気い付けや…この漬物ウマツ」

短期連載コメディーの主人公殺すかフツー…！！

てか、このままだとクラスメートに流れ弾が…
地獄絵図が想像出来た僕は、気ままに弁当を食ってるヒカルの言葉に不満を感じながら、みんなに被害のかわらないように教室の外へ走りだした。

ハイッ、ここまでが長い回想です。
回想中、走ってました。走り続けました。
そのおかげで今は安全地帯にいます。

「おつかね。ゆっくりしてって」

僕の目の前にはいい薫りの紅茶とコーヒー、お茶菓子が運ばれてきた。

それを運んできたのは、白衣を着た女性だ。

「四谷先生すいません。いつもお世話になっちゃって」
僕はコーヒーを受け取って、清潔そうな白いベットに座る。

そう、今僕がいるのは保健室、そして僕の隣に座っているのは…

「いいの。妹、迷惑かけてる」

気付いた方もいるでしょうが、この方は保健教師の四谷彩「よつやアヤ」。

そう、四谷先生はサキのお姉さんなのです！

…そしてサキは、お姉さんのいるこの保健室を攻撃してこないのです！

「…うん、四谷先生の入れるコーヒーは美味しい！」

「ありがとう。だけど先生やめて、アヤって呼んで」

「いや、昔はそうよんでたけどやっぱり先生だし…」

「……………」

四谷先生が無言で僕の左胸部、いわゆる心臓部にスナイパーライフルが当ててる「ゼロ距離」回避不可…

「すいません！ でも、さん付けで許してください！」

「…分かった」

四谷…アヤさんはしぶしぶ承諾してくれた。

なんで姉妹揃ってドラグノフを？

四谷家はスナイパーブームか？

そんなアヤさんは肩まである赤みのおびた髪の左側前髪をのばして片目が隠れているため、『虎柄のチャンチャンコを着た妖怪少年』を思い出させる。

だけど、さすが大人の女性。出る所は出て引つ込む所は引つ込んでる。『風呂好きな目玉が父親の少年』とは訳が違う。

さすがまだ？……

「かーくん、ダメ」

「…はい」

歳を言いそうになったのは悪かった、こめかみに銃口向けると『かーくん』はちょっと…

「かーくんはかーくん、それ以上でもそれ以下でもない」

「ちょっと格好いいセリフ…って、人の心読まないください」

こんな無口で不思議で少し強引だけど、とつてもいい人だ。

こうやって、僕を助けてくれるからありがたい。

…いつも世話になってる分、少しぐらいの妥協はしよう。

「…分かりました。だけど、友達の前では名字をお願いします」

「分かった」

僕は銃口が降ろされるのを横目に見ながら、ぬるくなったコーヒーを飲み干した。

おっと、そろそろ午後の授業が始まる。

コーヒーを飲み切った僕は、座っていたベットから腰を浮かす。同時に眉間に何か、黒く光りした細長いものが突き付けられる。

「まだ来たばかり。かーくん、まだここにいる」
「で、でも授業が」
「関係ない」
「…はい」

午後は安全地帯(?)で過ごすことになりそうだ…

3、昼は安全地帯へ逃避（後書き）

ヒカル・「なあなあ」

カケル・「なんだ？」

ヒカル・「なんかアヤさんの描写俺等よりも細くねえ？」

カケル・「作者のお気に入りなんだろ、あの作者はえこひいきする
最悪な人だか…！」

ドキューン

4、みんな…死なない(前書き)

四話目にして、もうネタバレ必死の状態ツス!(汗
結果が分かってても、どうか結末まで読んでください!

4、みんな…死なない

カケルはどうやら、俺が購買に行っている間にサキの襲撃を受けたようだ。

「なあレイ、あれで『緩和された』と言えるんか？」

ヒカルが俺の前に来ながら質問をしてくる。

「なにがだ？」

「サキの攻撃がや」

ヒカルもサキの射撃を見たらしい。

普通はそう思うな、普通はな…

「ああ、バズーカ砲や手榴弾、戦闘ヘリに戦車、ピーク時にはメガ粒子砲まであった」

「だけど、あいつは普通じゃないんだよ。」

「…冗談ッしょ？」

「無論、事実だ。中学の校舎が全壊した事もある。鉛玉はましな方だ」

「……………」

その様子が想像出来たのだろう。

ヒカルの顔は青ざめていた。

俺もその場にいなければ、その地獄絵図への抗体がないだろう。

ヒカルはカケルのいない席を見て、動揺したようだ。

「…カケル生きてるんか？」

「大丈夫。たぶん、保健室に避難したのだろう」

あそこには四谷姉がいるはずだ。

サキは姉の近くで攻撃することはない。

「アヤさんのトコかあ。…ホンマに大丈夫か？」

「……………たぶん」

たぶん銃でも向けられてるだろうが、死んではいないだろう。

「それよりも朝の『あれ』ってなんだったん」

ヒカルはそれ以上考えるのを諦めたようだ。

「そういえば、話すの忘れていたな」

「そうそう、聞く前に田口さんの『必殺・広辞苑の「大当たり」の次の項目は「大穴」チョップ!』を食らったからなあ」

「…トリビア的な必殺技だな。…まあいい。その前に、お前は知ってるか？ 二年前の『四谷財閥令嬢誘拐未遂事件』を…」

「かーくん。あれから、だいじょうぶ？」

僕が十二杯目のコーヒーを飲み終えた時に、アヤさんは俯きながら聞いてきた。

「あれってなんのことですか？」

なんのことを聞いているか予想はついたけど、ハズレたら嫌な空気になりそうだった。

「…二年前、私たち、つけた傷」

予想は的中してしまった。

「それはもう昔のことです。それに、傷は三人とも受けています」

「…でも、あれは…！」
僕はアヤさんの頭に、ポンッと手を乗せる。
同時にアヤさんの体が、ビクッと反応する。

「大丈夫。みんな生きてるから」

あのことになる、アヤさんは異常に暗くなる。

あのことは、二年前にアヤさんとサキが誘拐されたことがあった。
その時に巻き込まれた僕は犯人に怪我を負わされた。
たったそれだけのこと。

時計を見ると、もう帰りのホームルームも終わってる時間だ。

「まっ、下手すればサキに殺されますけどね」
そういつて僕は保健室の出口に迎う。

「かーくん、死なない」
その声に振り返ると、さっきまで落ち込んでたアキさんは、いつも
アキさんに戻っていた。

「そう言われると、今日も逃げ切れる気がします」
返事を笑顔で返した僕は戦場へと歩きだした。

俺とヒカルは帰りのホームルームが終わって、帰路に着きながらま

だ話を続けていた。

「……これが俺が知っている二年前の出来事だ」

「……」

話を終わるとヒカルは珍しく暗い顔をしていた。

「……そんなことあったんかい…カケルはなんも言わんかった」

「あいつはあまり話したからないからな。たとえ話しても『自分が巻き込まれて怪我をした』としか言わないだろう」

俺も事実を知ったのは、たまたま四谷姉が教えてくれたからだ。

「二人が誘拐されたんはニュースで見たけど、カケルが関わったとわな」

今更ながら、彼女達は日本政財界に名をはせる四谷財閥のお嬢様である。

それぐらいの金が無ければ戦車などを持っている訳がない。

実際、この戌神高校や戌神中学校、戌神小学校は四谷財閥の多大なる寄付によつて成り立っている。そういうこともあり、二人が銃刀法違反に引つ掛からないのも…それ以上言う必要はないだろう。

なぜ俺がそんなことを知っているかだと？

…趣味だ。

蛇足だが、俺は作者の後付け設定に文句は言わない。

我が身を大切にしたいのは誰でも一緒だ。

「それ以来、サキの攻撃は緩和された。さらにカケルの一人称は『俺』から『僕』になった。」

「あっ！ そう言われりゃ変わったな」

「気づいてなかったのか？」

「カケル、あんま変わってへんから。全然気づけへんかったわ」
「……………」

俺は今と昔のカケルの姿を照らし合わせてみた。
中の上の顔に細い体。

へたレな性格ゆえ、呼び名は『伊達』『カケル』侮辱で『チキン』
極少数『かーくん』

そして肩まである、しなやかなのにボサボサになっている黒髪。

…確かにあまり変わってない。変わったのは成長によって体格、あ
と『俺』の頃はその髪を縛ってたな…

「フツ……………」

「レイ？ どうしたん？」

「いやっ、なんでもない。それよりヒカル、カケルの中学時代のあ
だ名は分かるか？」

「ん、？ 鶏ちやうん？」

…回りくどいのか、直球なのか分からない答えだ。

「確かに学校では『チキン』とか呼ばれていた」
学校ではずつと逃げていたからそう呼ばれた。

「しかし、一部では違う呼ばれ方をしていた」

そう、カケルの姿、行動から名付けられた呼び名。

思い出すだけで口角が上がってしまいそうになるその姿。

「……………黒猫だ」

4、みんな…死なない(後書き)

カケル「前回の後書きは酷い目にあつた」

レイ「これに懲りたら口を謹むのだな」

カケル「それにしても、この作者伏線置きヘタだよねえ」

レイ「…いいのかカケル？ そんなこと言っている…」

カケル「ン…マシガン!？」

ズバババババババツッ

レイ「…蜂の巣だな」

5、ヘタレチキンは見ても見ぬふり（前書き）

シリアスに突入！

コメディなのにスンマセン…

5、ヘタレチキンは見て見ぬふり

保健室を出てから数分で教室に着いた僕は、拍子抜けしていた。理由はただ一つ、サキの強襲がないから。

僕の予想では『スナイパーライフルを、イングラムM10サブマシンガンに切り換えたサキに蜂の巣にされそうになる』確率が高かったんだけど…

「よかったあ、今日は普通に帰れそうだ」

僕は無事に戻れたことを神に感謝しながら、自分のバックに手を伸ばす。

「帰ったら寝よ…ってうお!？」

僕が触れる前にバッグが揺れる。

「って、携帯入れてたんだっ」

携帯の着信で驚くなんて…僕ってやっぱり臆病者だな。

僕が自虐的になりながら携帯を見ると、『ディスプレイ』『和泉玲』と出てた。

「もしもし、レイ？ レイから電話してくるなんて珍しいね」

「ああ、緊急の連絡だ。これから言うことは全部聞いてくれ」
レイは冷静に話してるけど、声は焦ってるみたいだった。

「緊急の連絡って…?」

僕はその声から、直観的に不安を覚えた。

カケルとの電話を終えた後、すぐにメールを送信した。
これで俺のやるべきは終わった。
後は……

「誰に電話してたん？ 彼女？」

ヒカルは興味津々な視線を俺に送ってくる。

メールを送信していたことは気づいていないようだ。

「残念、相手はカケルだ」

「なんや、噂のクロネコヤ〇トかいな」

ヒカルはつまらなそうに軽い口調だった。

しかし、カケルは某運輸会社じゃないぞ。

「つまらないか？」

「つまらんわ」

「だったら、今から面白い場所行くか？」

「イクイク！！」

「完全に『ウ くる！？』のノリだな」

それにヒカルの顔はかなり嬉しそうだ。

「それでどこいくん？ 北の將軍様に会いに行くん？」

「…さすがにそれは無理だ。しかし、暇つぶしにはなる」

「了解。ほなレッツゴー！！」

ヒカルは場所も知らないのに、先に歩きだした。

「…ヒカル、こっちだ」

電話先でカケルが『俺』と言ったことを聞き逃さなかった自分の耳に感謝しながら、俺はその場所に向かい歩きだした。

「はぁ…面倒クサッ」

昇降口から外を見ると、すでに空が赤く染まっていた。

「長電話し過ぎたな…」

レイからの電話の内容は、サキが誘拐されたということだった。

丁寧に監禁場所や犯人の数、犯人達の個人の趣味やフェチズムまで、ありとあらゆる情報まで教えられた。

レイがどこからそんな情報を得ているのかは、腐れ縁でも分からない。

「…たく、レイも何考えてるんだか…」

場所を教えるのは『そこに行く』って決定してるようなものだ。

「…行くわけないのに」

誘拐されたなら警察が救ける。そんな事が起こる場所に行く必要はない。

そう、チキンは逃げる。

ヘタレは見ても見ぬふりをする。
それだけでいいじゃないか。
わざわざ面倒に近づく意味が分からない。

せいぜい、このことでサキが被害者の心を知って、攻撃がなくなることを祈るまで。

「そろそろ髪切る」

さっきまで気にならなかった、伸びた後ろ髪が妙に邪魔くさい。
バッグに入ってた黒い紐で後ろ髪を一本にまとめる

「さて、出前でも取るか……」

髪をまとめ終わった俺は、バッグと携帯を手に校門の外へと歩きだした。

5、ヘタレチキンは見て見ぬふり（後書き）

カケル「さ、作者め…俺を殺す気が!！」

ヒカル「そっやと思う」

レイ「右に同意」

カケル「くうッ！　今回ネタ切れで字数稼ぐの必死だったくせにい!！」

プチッ

カケル「……何もしてこねえ！　ついに自分の非を認めたか!！」

ヒカル「作者、キレたな」

レイ「今度の後書き俺パス」

作者ノ怒リ、次回爆発ウウ!!

6、痛みを記憶をシンゲツが照らす

私は保健室の中で携帯を持って立ち尽くしていた。

その理由は妹やかーくんの友達の和泉くんからのメールの内容。

「アヤが誘拐された。場所は戌神デパートB塔建設現場17階。今『シンゲツ』と救出に向かっている」

誘拐事件…『シンゲツ』……

それは二年前の事件に酷使していた。

二年前、私達姉妹は誘拐された。

私達と一緒にいたかーくんも一緒に。

かーくんは私達を守ろうとして何度も殴られて気絶した。

私達は布を口に当てられて眠らされた。

起きた時には、私達は手足を縛られた状態で暗くて油臭い場所にいた。救けられてから分かったけど、そこは廃工場だった。

そこで私が見たのは、私達を誘拐したらしい柄の悪い人達。

暗闇の中、何十人もいるその人は、既に地に伏せていた。

その中心に誰かが立っていた。

暗くてよく見えなかったその人は、私達に近づいた。敵か味方分からないけど、その人から安心感を覚え、私は抵抗しなかった。

その人は私達の縄を解いてくれた。

妹は縄が解かれた時に起きたようだったけど、すぐ寝てしまった。

だから、この後を見たのは私だけ。

その人の後ろには、一つの陰が黒く冷たい光を持っていた。

その光は私に向けられていた

それは拳銃だった。

私は反射的に目を瞑る。

パンツ

乾いた破裂音。

その音を聞いた時は死んだと思った。

だけど、私は生きていた。

恐る恐る目を開いた時には陰はなく、その人が倒したようだった。

しかし、その人も倒れた。

その人は、私をかばって弾を受けた。

私はその人に近づいて手を取る。ぐったりしている顔に、私は見覚えがあった。

その人：彼は私の身近な人だった。

手に感じる冷たい感覚。

私は自分の手を見る。

赤に染まる私の手。

私の手を染めたのは

血、血、血…

彼ハ死ヌ?

私ノタメニ?

私ヲカバツタ?

何デ? ドウシテ?

……ヤ

……イヤ

「いやあああああああ!」

思い出すたび、忘れられないほどの恐怖に、私は飲み込まれそうになる。

あれ以来、私はうまく話すことが出来なくなった。

背中にじつとりと汗をかいている。
無意識に握り締めていた手が痛い。
手を見ると、爪の跡がくつきりついていた。

……絶叫した後、私も放心状態になって何も出来なくなった私達は、
駆け付けた警察に助けられた。

私達を救ってくれた彼は、銃弾の他にも致命傷になりかねない傷を
多く負っていた。

それでも彼は一命を取り留めた。

その後分かったのは、和泉くんが私達の居場所を警察に連絡したこ
と。

私達を誘拐したのは、身代金目的の地元暴力団だった。

そして、私達を死にそうになりながらも救ってくれた彼は、一部で
『シンゲツ』と呼ばれていた事……

「……妹を、救けて」

私は保健室の窓の外に向かい祈る。

それは妹の無事ではない。

彼が必ず救けてくれるから祈る必要はない。

「自分を、犠牲にしないで。……生きて、帰ってきて」

私は彼の無事を窓から見えた夕日に祈る。

もう、傷ついてほしくない彼のために。

「…ここどこ？」

目を開けた私は、見慣れない場所に放り出されてた。

時間は真つ赤な夕日が射し込んでるから五、六時ぐらい。

私の手足は縄で縛られて、身動きが取れない。

埃っぽいコンクリートに横たわってたせいで、下になってた左腕が痛い。

「…私、何してたんだっけ？」

ホームルームが終わってから、カケルを待ち伏せするためにいいスポット探してたんだ。

そしたら、いきなり黒服のハゲ頭に声かけられてから…どうしたんだっけ？

「お？ やつと起きたようだな、嬢ちゃん」私の思考を邪魔した、ごつい声のした方を見ると……

「ああ！！ 私に馴々しく話し掛けてきた変態巨大タコヘッド！」

「変な呼び方するなボケ！ てか、俺は変態じゃねえ！」

目の前の変態（以下省略）は怒鳴りながら、見る見るうちに顔が赤くなっていく。

「変態巨大タコヘッドが、ド変態超巨大ツルピカ茹でタコヘッド変

身したあ!!!」

「人を怪人みたいな扱いするんじゃないじゃねえ!!!」
まったく、冗談の通じないド変態（省略）だこと。

「じゃあ、タコ」

「タコじゃねえ!」

「タコ」

「タコって呼ぶな!」

「クソダコ」

「だからタコじゃ」

「慈悲深い神様でも救う気も失せる腐れ下道のクソカスダコ」

「………タコでいい」

「じゃあ、タコは誰なの？ 私をこんな所につれてきてなんのよう？ 私を誰だか分かっているの？」

泣きそうだったタコが、頭を抱えながらため息を吐く。

「………たく四谷財閥のご令嬢、四谷彩貴ってのがこんなに毒舌だとは思わなかったよ」

やっぱり分かってたわね。

「じゃあ、目的はお金……」

「悪いが目的は金じゃねえんだ」

「えっ?」

私の予想してない答え。

「嬢ちゃんは覚えてないかな？ 俺たちは二年前に嬢ちゃんを誘拐したんだぜ」

…二年前、私達姉妹：あと、カケルが被害者になった誘拐事件。
私は大体を寝てしまつてたからよく分からない。
だけど、姉が対人恐怖症になつた原因でもあり、カケルの少し入院
するぐらいの怪我した事件。

「驚いてるみてえだな」

さつきまで気にしてなかつたタコの笑みが、ミンチにしてやりたい
程クソ憎たらしくなる。

そして、いつのまにかタコの周りには、鉄パイプやらナイフを持っ
た黒服の男が何十人もいた。

「そついや、あれからお姉さんは大変らしいなあ。…つと話がそれ
たな。じゃあ本題に入る」

…大変らしい？

このタコ…殺す！

今すぐ顔面殴り飛ばしてその口踏み潰してやる！！

「そう恐い顔しないで笑いなつて。なんせ譲ちゃんには『シンゲツ』
つて人を誘き寄せるエサになつてもらうだからよ」

…はあ？

「『シンゲツ』つて誰よ！？ 私知らないわよッ！」

なんで、私が知りもしない人のエサにされなきゃならないのよ！

タコの頭に『？』が浮かぶ。

「知らないわけないだろ？ 『シンゲツ』は嬢ちゃんと一緒に捕ま
つ…」

ニヤアゝ

「……猫？」

いきなりのことに、私はタコと八モってしまった。

その原因は、黒い猫がスタスタと私とタコの間を割って歩いてきたから。

それも呑気にあくびまでしてる。

「兄貴！！」

タコの後ろから部下らしき人がこちらに走ってくる。

「兄貴！ ヤツが来ました！」

その言葉に静まり返った空間。

耳を澄ませばリズムミカルな足音と人の声が聞こえる。

コツコツ…

「…あーあ、足の小指がまだ痛てえ」

コツコツコツ…

「さすが戌神デパートのコンクリだ、頑丈に出来てる」

コツコツコツコツ…

「木のタンスだったら木っ端微塵にして無効化出来るんだけどな」

コツコツコツコツコツ…

「嘘だって？ だったら試してやろうか？ お前の顔面で」

コツコツコツコツコツコツ…

「分かった。じゃあ、デパートのB塔の17階で待ってるぞ」

コツン

「おっ？ こんな所でサキが不様な姿してる。これがいわゆる誘拐

ってやつか？」

部下が来た暗闇から現われた人は携帯で話ながら、片手にぐったりしている黒服の男を引きずっていた。

いつのまにか、目の前にいたはずの黒猫がその人の足に擦り寄っていた。

「……………っ!？」

全身黒づくめの服

後ろ髪だけを一本にまとめたしなやかな黒髪。

日が沈み、薄暗い中で金色に光る瞳。

いつもと姿は違うけど、その顔と声は私がよく知るものだった。

「やっぱり食い付いてきたな…『シンゲツ』」

私とタコ達の目線の先には…カケルが立っていた。

6、痛みを記憶をシンゲツが照らす（後書き）

カケル「アレッ？ 作者の気配がない」

アヤ「さつき、武器庫、入ってた」

カケル「武器庫？」

アヤ「いろいろ、武器、ある。デザートイーグル、対戦車手榴弾、スカットミサイル、コロニーレザー……」

カケル「アハッ…俺、今度生きてるかなあ？」

7、シンゲツのクロネコ（前書き）

今回は焦って書いたため駄文になった可能性大（汗
間違いを見つけた場合、容赦なく指摘してください！

7、シンゲツのクロネコ

俺はヒカルと一緒にとある高層ビルの屋上にいた。

そのヒカルは、俺の渡した高性能双眼鏡（赤外線暗視機能付き）で、少し離れた建設現場の方を見ていた。

正直、怪しい過ぎるがここは気にしないことにする。

「…なあレイ、あれホンマにカケルか？」

ヒカルは啞然とカケルの様子を見ているようだ。

「ああ、あれが伊達カケルの別名『新月の黒猫』の姿だ。俺は黒猫と呼んでいるが、俺以外のほとんどが新月と呼んでいる」

俺も予備の双眼鏡でヒカルと同じ方を見る。

…昔と変わらない。

もう見られないと思っていた。

二年前…

入院したカケルを見舞った時、彼から聞いた言葉は弱々しいものだった。

「俺は守るべきものを守れなかった。俺は…本当は他人を守れるほどの力はなかった…」

それからカケルは『新月の黒猫』の姿を、自分を『俺』と呼ばないことで封印したようだった。

チキンの『僕』として、すべての事から逃げようとしていた。だが…

「自分でなく、他人の危機に目覚めるか…黒猫らしいな…」

「ん…なんか言ったか？」

「ああ、ひとり言だ」
いつの間にかヒカルが俺を覗き込んでいた。

「それより、これからカケルをしつかり見とけ。見れば、何故『新月の黒猫』と呼ばれるか分かる」
そう言いながら俺自身、これから起こることを見逃さないために、視線をカケルに戻した。

「さすが四谷財閥最強の男、嬢ちゃんのピンチにはすぐ駆け付けるんだな」
タコが目の前のカケルにむかって、なめた口調で話し掛ける。

「…勘違いすんな。俺は気分で来ただけだ。それに、俺は四谷をやめた」
一方のカケルは、足元の猫をしゃがみながら片手でじゃらしている。でも、その金色に輝く瞳はタコを見据えてた。

そんな二人を見ている私の頭は混乱していた。
誘拐なら小さい頃から何十回もされている。
今更慌てることじゃない。
だけど…

「なっ…なんであんたがこんな所来てるのよ!! それに四谷財閥最強!? 昔の話ってなに!? わけ分かんないっ!!」

カケルがここにいることも。
二人の会話の意味も。
すべてが分からなかった。

「へえ、嬢ちゃんは知らないのか？ あんたも可哀相だな。二年前嬢ちゃん達を守るために、何発も銃弾体に埋め込まれて死にかけたのにな」

「えっ……」

二年前、確かにカケルは怪我して入院した。
私はちよつとした骨折としか聞いてない
面会謝絶はされてたけど、二週間後には学校に来ていたから気にも
しなかった。

…私は関係者なのに、なにも知らなかった…

「せつかくだから教えてやるよ。こいつは四谷財閥の隠密・障害抹殺部隊長『新月の黒猫』と呼ば…っ！」
へらへらしゃべってたタコの言葉が突然止まる。

「黙ってくれ」

カケルの声が聞こえたけど、カケルがいた場所には寝転がる黒猫しかいなかった。

「昔話はもういい。とつとと始めよう」

威圧感のあるカケルの声は、タコの目の前から聞こえた。
そして、タコの体は周りにいた人達の一部を巻き込みながら派手に後ろに吹っ飛んだ。

さっきまで黙って見ただけだった人達全員が一気に殺気立つ。

その殺気の先には…何もなかった。

「サキ、お前はとつと逃げろ」

「なっ…！ カケル！？」

今度は私の後ろから声が聞こえ、手足の縄が解かれていた。

「あんた、なんで後ろにいんのよ！」

「グダグダ言つてないで早く逃げろ！ でないと…っってもう遅いみたいだな」

そう言われて周りを見ると、私達は鉄パイプや拳銃、日本刀など持った物騒な人達に囲まれていた。

「つたく…サキ！」

「なに！？」

「生きて帰りたいなら…適当に逃げてる！」

「分かつ…ってちよつと…！」

私が反論する前に、カケルは私の前から姿を消していた。それと同時に目の前を何人もの人が吹っ飛んでいった。

カケルが戦い始めて三分二十六秒。
俺たちはずっとそこだけを見ていた。

「あ、見失った！」

「サキの近くにいる。ちょうど裏拳で二人殴り飛ばしているぞ」

「あ、また見失った！」

「今見てる所の手前だ。黒服に顔面に膝蹴りしている」

「…また」

「俺達から見て右側の方で日本刀を手刀で叩き割っている」

「……」

「やっと起き上がってきたスキンヘッドの股間にライダーキックかましてる…っん？」

視線を感じた方を向くと、俺はヒカルに凝視されていた。

「…レイ、聞きたいことがあるんやけど」

ヒカルの目は疑いを含んでいた。

「なんだ？」

「レイはなんでカケルの位置が分かるん？ てか、カケルはどうして瞬間移動できるん？ それに、あれだけ敵がいるのに無傷はおかしいやろ？」

一部訂正、ヒカルの目は好奇心の塊だった。

「そう質問攻めにするな」

俺は、彼の期待にこたえることにした。

「最初の質問の答えは簡単。俺は人より長くカケルの近くにいたら、大体予測できる」

そう、小学校から今までカケルと一緒にだった俺は、世界で三番目に彼と共にいる。

彼は一人暮らしをしている。

両親はもういないらしい。

だから、俺は『彼女達』の次ののだ。

(どんなに振り回されてても、大切なんだな…)

「レイ？　どうかしたか？」

「んっ、なんでもない」

思いに耽っていた俺は、目の前のヒカルをすっかり忘れていた。

「…ちよつと間が空いたが気にするな。あと二つの質問の答えはな

……」

そう言つて、俺は小さな戦場を指差す。

「今までの二人の様子を見てたならよく分かるはずだ」

俺の指が差した先の丁度先には、黒服二人に襲われそうになるサキと、その二人をハングリーツリーで仕留めるカケルがいた。

7、シンゲツのクロネコ（後書き）

カケル「今回も作者はいないな」

ヒカル「その代わりこんなんがあつたで」

カケル「なに？」

ヒカル「『対主人公用核弾頭ミサイル・テポドン零号発射ボタン』

だっ…ヘックション！」

ポチッ

「…！！」

8、最強の出前。〈Chicken or Cat〉

ヒカルは、頭に『？』が浮かびそうな顔をしている。
ちよつと説明が足りなかったか…

「カケルは瞬間移動していない。…しいて言うなら、忍者の『分身の術』だ」

…ダメだ。頭上の『？』が増えた。

読者には悪いが長文で説明するしかあるまい…

「カケルは人の気配を敏感に感じ取り、自分の気配を操れる。瞬間移動してるように見えるのは、気配を操ってるかららしい」

ここからは本人の説明を使わせていただく。

「移動する寸前、強烈な気配を放ち、分身のようなものを作る。そして気配を消して移動することで、次に現われた時に瞬間移動しているように感じるらしい。…まあ、その移動速度も人知を超えているがな」

俺達のように、遠くで監視するように見ても見失うのだ。

移動中の気配は『無』と言えるだろう。

…異様な身のこなし。

闇夜に光る金色の瞳。

カケルの動きに合わせ、動物の尾のように動く、一本に縛られた後ろ髪…

その姿からは、誰しもチキンを想像出来ないだろう。

「カケルの戦った者に『その姿、あるのに見えぬ新月の如し』と言った者がいた。さらに『新月の敵には不幸（敗北）が待っている』とも言われている」

そう、それはまるで不幸を呼び込む『黒猫』

だが、大体の人が『新月の黒猫』の本当の意味を知らない。月は形を変えるのだから…

「…せやかて、あんな人数で…それも拳銃持ってんのに、無傷はありえへんやろ？」

いきなり口を開いたヒカル。その声は少し震えていた。

だが、そこまで心配する必要はあるまい。

彼は…

「なあヒカル、忘れてないか？ カケルがいつもなにに狙われ、なにを避けてるか」

「……………！？ なるほど！！」

大声で叫んだところを見ると、すべてが分かったようだ。

「分かったならよく見とけ、最後を見逃すぞ」

「リョーカイ！」

俺とヒカルは、視線をカケルのいる方へと戻した。

「右だ、右い！ クハッ！」
「クソッ、また消えた！…ブッ」
「ヤツに当たらないなら人質を…カツ！？」

敵三、沈黙。 残存八…
つて、確認する必要ねえのに…癡だな。

「死ねえええええ！！」
チッ、油断して気配がばれた…
…でも、死ねと言われて死ぬほど、俺は重症鬱病患者じゃねえよ。
「グヴァー！！」
多勢相手にはやっぱ裏拳だな

「どっ、どうして弾が当たらねえ！？」
二度ほど寝かせていたはずのスキンヘッドが、俺に背中を向けて叫んでいる。

おっと、そろそろ時間だな…

人質を取られないように、サキの前に移動する。
「つつたく、下手な鉄砲は数射つても当たんねえんだな」
そう言いながら、気配を少し強くする。

バラバラな方向を向いていた七人が、一斉にこっちを振り向いた。

「俺に普通の弾は当たらねえよ」
なぜなら俺は…

「俺を仕留めたいなら、サキみたいにフィンファンルでも用意しな！ あれなら四割弱で俺を殺せる」

…あの時は、中学校の校舎が犠牲になったなあ。

死者、負傷者共にゼロだったのは俺だけを狙ってたからだろう。

「……………無茶だろ！！ その嬢ちゃんはニュータイプかよ！？」

おお〜！ ノリいいねスキンヘッド！

いいツッコミするほど、認めたくないのはわかるけど…

「…こいつとその姉は、姉妹揃って自由乃打撃ストライクフリーダムの操縦者級の力を持っている」

サキは、本当に嫌いなヤツにしか発動しないみたいだけだな。

例えば俺とか、俺とか、俺とか…

ついでにそのフィンファンルは、アヤさんが学校警備のために使っているそうだな。

後ろの様子を見る。

黒猫を膝に乗せたまま動かないが、意識はあるようだ。

そして、さっきまでの話は聞こえてないようだった。
フウ、命拾いしたぜ…

…おっ、やっと来たか。

「ふざけたこと言ってんじゃねえ!!」
大声で叫んだスキンヘッドが懲りもせず俺に銃口を向ける。

これを避ければ相手の武器は……!?

パンッ

俺の記憶が正しければ、前にも似たようなことがあったな…

俺はそこを動かなかった。

パンッ

「えっ…」
さっきまで、銃声が聞こえるたびに消えていたカケルの姿が、消えずに目の前にあった。

私がいつも追い掛ける背中が…
でも、いつもより大きな背中がそこにあった。

「…まったく…当たんねえって言うてんじゃねえか」

カケルの声からは、余裕が滲み出た。

今まで、私の膝に乗っていた猫がカケルの足に擦り寄る。

「まったく、誘拐までして丁重に接待してくれたお前等に、俺から特別デリバリーのプレゼントだ」

カケルの声と同時に、左右からライトみたいな光が満ちて、眩しくなった私は目を瞑った。

そして、聞こえてきた声は…

「四谷親衛隊 No. 124、田中！！ 肉体派親衛隊員を連れ、精鋭92名到着！！」

目を瞑ってるから見えないけど、その声は確かにクラスメートの田中くんだった。

「四谷親衛隊一丁っ！ ……って遅かったじゃねえか、田中」

カケルが呼んだみたい。

今朝は派手に喧嘩してたのに。

「すまない……ってカケルか？ いつもと雰囲気が違うな」

「気にするな。そんなことよりも、今は目の前の敵が先だろ？」

田中くんは、うむと唸って頷いたみたい。

「奴らの武器は俺が全部無力化しといた。サキを襲われたお前等の怒り……存分に叩きこめ！！」

「我等、四谷親衛隊の名に賭け、四谷さんの敵を殲滅せん！！」

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」×91

その低重音の声に空気が震え、地面が揺らぐ。

その声は左右から迫ってきて、私の正面でぶつかり合った

「…サキ、ゴメンな。もう大丈夫だから…」

「えっ！ カケル？」

その声を聞いて、私が急いで目を開けた時には、ぼんやりと映る田中くん達にボコボコにされてるタコ達と、目の前の黒い猫。

私は眩しさに目を痛ませながら、ゆっくりと立ち上がって、どこにあるのか分からない出口に向かって歩きだした。

あの背中を追うために…

…カケルはいつも、俺の予想を超えた行動をとってくれる。

まさか、敵対する親衛隊の力を借りるとは…

だが、サキのことになれば神さえ恐れぬ最強の部隊だ。

上手いこと利用して、カケルは戦線離脱したようだ。

「さて、大体終わったことやし、そろそろ帰ろうや」

ヒカルはあくびをしながら伸びをする。

「なあ、レイ？」

「なんだ？」

俺は着信した携帯を見ながら、ヒカルの問いに耳を傾けた。

「チキンのカケル、黒猫のカケル…どっちがホンマのカケルなん？」

ヒカルの声は、異様な真剣味を帯びていた。

ヒカルは嘘が嫌いだ。

チキンのカケルが『偽り』だったとしたら、ヒカルはカケルを半殺

しにするだろう。

「ただ、『そんなことか』と俺は思う。」

「それは俺にも分からない。だが『カケルはカケル。それ以上でもそれ以下でもない』……」

四谷姉は黒猫のカケルを知った時、はっきりとそう言っていた。

「……お前がどう思うか分からない。だが、俺はそう思ってる」

俺の言葉を聞いたヒカルは、大きなため息を吐いて

「……右に同じくやで」

と、暗闇でも分かる明るい顔で笑っていた。

「では、カケルからの指令だ。サキを追うぞ」

「指令？」

俺はヒカルにさっき届いたメールを見せる。

「……ここにいること教えたん？」

「そんな記憶はない……120m離れても存在がバレるとは……」

そのメールの内容は

『閲覧料は二人合わせて二万円。』

それがイヤなら、警察に連絡。その後、サキが痴漢及び親衛隊等に襲われないよう監視・護衛をすること』

だった。

このメールを見たヒカルの反応は
「一人一万は高いやろ」
だった。

8、最強の出前。〈Chicken or Cat〉(後書き)

カケル「ああ、今日は空が綺麗だ…昼間なのに流れ星が見えるよ」

M・Y氏「核弾頭ミサイルという名の流れ星がな！」

カケル「…って、作者あ！ どう考えたってYebisu Mik
iのイニシャルだろうがあ！！ てか……………！！！！！！！！」

ズボーン

M・Y氏「…綺麗なキノコ雲だ」

9、破壊の過去、守護の今（前書き）

八話を7/23に読んだ方は、夜に劇的Before After
rしたため九話の前に八話を読むことをお勧めします。

どうもスイマセンでした。

9、破壊の過去、守護の今

一人の少年がいた。

本来優しかった少年は、いつのまにか野獣のような瞳で人を拒絶していた。

必然的に、少年の周りから次々人が去っていった。

そんな少年に一人の少女が近づいてきた。

少年と幼馴染みの少女は、少年の剣幕に怯えもせず、その目の前に立つ。

パチンッ

「アンタ…ふざけんじゃないわよ！」

その言葉と同時に、少年の驚いた顔の左頬には、少女の手形が残っていた…

僕は一人で暗い夜道を、自宅に向かって歩いてた。
教師or警察に見つかったら補導される時間だ。

「…やっぱ、二年も実戦から離れてると疲れるわ」

体は毎日鍛えて（強制的）いても『朔望月相』さくぼうげっそうは精神的、肉体的に相当負担をかける。

あつ、『朔望月相』って言うのは『新月』とか言われる僕の別名の総称のことだ。

四谷財閥に世話になっていた頃は、政財界や学界や魔界、武道や極道や六道…いろんな所でお世話になったため、各界で『新月』みたいな別名が勝手につけられてる。

ついでに『新月』は、二年前の事件で裏の世間に存在がバレたから、隠密ののになんか一番多く呼ばれている別名になってる。

まあ、いつもの僕がそんな完璧（異質）人間な訳じゃない。

隠密の頃の名残で、口調変えたり、眼鏡掛けたりすることで、各別名の能力（？）のスイッチが入るのだ。

…今、僕のこと

「イメチェンで自分が変わったように感じるイカれた野郎だ」
って思った人。

まだ僕、髪縛ってますから、すぐに闇討ち出来ますよ

又、

「じゃあ、いつもはやっぱりチキンなんだな」
って思った人。

…まぎれもない事実です。

…話を戻します。

そんなこんなで俺の周りで『朔望月相』を全部知ってる人は、サキたちの父親であり四谷財閥の現総取締役、四谷源蔵よつやげんぞうとレイぐらいだろ。

元職場のトップが知っていてもおかしくないけど、レイが知っていたことに驚いた。

さすがレイの情報網は迅速かつ正確、さらに凶悪。

前に、レイに喧嘩を売ってきた不良系上級生は、彼の耳打ち一つでパシリになった。

アイツを敵に回したら、個人情報とプライベートが地球の裏側まで広まるだろ。

…まあ、今回の情報も迅速だったおかげで、この事件が世間に広まることはない。

後でなにか奢ってあげよ…

ニヤ

説明で忙しかった僕は、その鳴き声を聞いて前方を見る
すると、一つ先の蛍光灯の下で黒猫が座っていた。

…その先の闇から誰かが近づいてくる。

意識を集中して気配を探る。
敵意があれば…逃げればいい。

この気配は…

「……………サキか？」

猫の手前で歩みを止めたのは、間違えなくサキだった。

その顔は…完全に怒ってるなコリヤ。

殺意…敵意…ってことで…

「待ちなさい！」

回れ右して逃げようとした僕は、右腕をサキに捕まれた。
諦めた僕は、サキの方へ振り返り…

パチンツ

「アンタ…ふざけんじゃないわよ！」

振り返りざま、僕の左頬に衝撃が走り、その後ヒリヒリと痛んだ。

…久しぶりにサキに向き合った。

165ぐらいの身長は昔より大きくなってるとは小さく見える。
首ぐらいまでだった栗色のポニーテールは、腰まで伸びてた。

姉と似てスタイルいい体に、雪のように白く細い手足。

その手足に、さっき縛られた部分の後が残っているのが…無性にムカつく。

そして昔から変わらぬ、強気な性格が現れたクッキリした容姿。
その強い意志が宿った黒い瞳は…やけに潤んでいた。

「二年前…アンタが私達を助けたって本当…？」

「ああ」

「あの時、死にそう…だったって…」

「医者はそう言った」

「なんで…アンタが助けに来んのよ？」

「気分的に行っただけ」

「パパに何させられてたの？」

「いろいろ」

「強いのに…いつも逃げてばっかなのよ…」

「それは僕がチキンだか…」

「…なんで私に反撃しないの！？　なんで、立ち向かいもしないで、

私に背中ばかり見せんのよ!？」

「……………サキ、下がって」

一方的な会話を中断し、僕はサキに背を向け戦闘態勢に入る。

「ったく、よく生き残ってたな…ハゲ野郎」

俺の目の先には、ボロボロになったスキンヘッドがいた。

「…調子に乗るな！ 俺はお前を殺すんだよ!!！」

スキンヘッドは理性を失ったように突っ込んでくる。

その手には、短刀が握られていた。

猪突猛進な攻撃は簡単に避けられる。

だけど…

今日は、こんな役回りが多いな…

まっ、たまにはいいけどね。

スキンヘッドの短刀が、左腕に突き刺さる。

…熱い。

根元まで刺さった短刀は、焼けるような痛みを腕全体に与える。

「カケル!？」

サキが呼んでるみたいだけど、それは後回し。

俺は目を閉じ、『気配』を一つに凝縮する。
手足は、もう存在さえしないイメージ。

「クソハゲ…お前に俺の本気^{マジ}を見せてやる。その目が節穴^{マシ}じゃねえならよく見ときな」

俺は凝縮した気配を爆発させた。

空気が重い…

背筋が凍るような圧力なのに、心は灼熱で焼かれるように悲鳴を上げてる。

首が締め上げられるように、呼吸が苦しい。

今まで感じたことない、絶対的なプレッシャー。

そのプレッシャーは、カケルから来ていた。

(こ…これが…あの力…ケル?)

いつも見ていたカケルから、心から恐怖している自分が信じられない。

私は力なくその場に座り込む。

立ち上がりたくても、足が震えて力が入らない。

私は、カケル背中を見るので精一杯だった。

「…って、このハゲ一瞬で気絶しやがった」

どこか抜けたカケルの声で、体が軽くなる。

さっきまでのプレッシャーは、嘘のように消えていた。

だけど、足と心は折れたように動いてくれず、しばらくは立てない。

「…サキ、これが僕が逃げる理由だ」

いつのまにか、カケルは目の前に立っていた。

「僕は不器用で弱い。そのくせ、大切なものが多い欲張りだ」

「だから、大切なものから離れようとした。だけど、お前達はそれを許してくれなかった」

「特にお前は、よく追っ掛けてくるし…さっきみたいに泣きそうになりながらビンタされたこともあった。『ふざけんじゃないわよ』ってね」

「…そんな時に、俺はお前等だけは守ると決めた」

「二年前、一度は諦めた…けど、大切なものが傷つくのを見過ごせなかった」

「僕の力は、大切なものを守るためだけにある」

「この力でお前等傷つけないために、背中向けて」

「まあ、お前からはいつも逃げて背中見せてるけどな…っつて、サキ…どうした？」

私は、カケルの言葉を聞くことしか出来なかった。

声を出したら、カケルにバレる。

カケルの方がずっと辛いはずなのに…こんな情けないところ見せられないよ…

「怒らした？ ゴメンな、襲い掛かないでくれよ。お互い疲れてるんだし」

怒ってなんかない。

私は、背中を向けてばかりの弱い彼が嫌いだった。

でも…私の見てなかった正面は、苦しみながらも私たちを守ってくれた。

「…じゃあ、そろそろレイ達来るから、気をつけて帰りな」

「……！？ ちょっと…」

私が涙を気にせず顔を上げた時には、さっきまでいたカケルの姿はもうなかった。

私は、レイ達が来るまでの間、止まらない嗚咽を一人、繰り返していた。

世界には表となる光の世界と、裏となる闇の世界があった

…冷たく…重く…絶望の闇世界

その中では、人は醜く、我欲に溺れ、闇に侵されていた

そして…ある光の世界の小学生は、闇の世界に両親を殺された

両親の代わりに少年の心に刻まれたのは、ドス黒い憎悪…

その心が闇の世界と同調するのに時間は掛からなかった

そして、両親を殺した闇の住人は壊れた

自分達が傷つけた、一人の少年の心に宿った『朔望月相』という闇によって…

復讐を終え、自分を見失い破壊を続ける少年は、ある男に拾われた
それから、自分の力を破壊しか使えない少年は、男の元で守ることを学んだ

少年は誓った

「周りに居てくれる人全員を、どんな手を使っても守り抜く」と
その時に闇の世界にいた少年は、大切なものを手に抜け出した

それから少年は、挫折を繰り返しながらも守り続けた。

それが少年のたった一つ、命をかけた誓いだから…

最終話前編、特別部隊と天使の悪戯（前書き）

1000HIT突破！！
すべての人に感謝感激です！！

この小説を読んで頂いているす

最終話前編、特別部隊と天使の悪戯

皆様、こんにちは。

伊達 カケル、伊達 カケルでございます。

…って選挙前によく聞く挨拶は置いといて、昨日いろいろあった僕は、早速生死の狭間に立たされていた。

時間帯は夕方の下校中。

現在地は学校のグラウンド。

周りにはガン〇ムもないし、不審者侵入してない。ここは地雷原でもないだろう。

…えっ、『なにが生死の狭間だ？ 夢でも被害妄想してんじゃねえよ』だって？

はっ、確かに妄想しすぎかもな。

むしろ夢なら、あとコンマ一秒以内に覚めてくれ。

けれど、それは後ろから着実に迫っていた…

『待てエエエエエエ！！』 × 不特定多数

そう、僕は追われてるんです。

だけど、僕は族にも機動隊にも北朝鮮工作員にも追われる筋合いはありません。

『殺スウウウウウ！！』 ×多数

何人もの雄叫び。

そこから感じる殺意。

そして後ろから迫ってくる熱気…

これは、この学校の生徒と教師の特別混合部隊ですね。

…まったく、なぜ僕がこんな奴らに追われなきゃならないんだ？

まっ、弾丸が飛んでこないだけマシか…

なんせ、僕の右腕には…

「ほら！ 早く逃げなさい！ 生徒会長命令よ！」

天下無双、史上最年少生徒会長・四谷サキ。

そして、我が左腕には…

「…かーくん、がんばって」

赤髪の白衣天使・四谷アヤ。

この二人（狙撃手）を肩に抱えて、僕は走っているんです

人二人を抱えて走れる僕の脚力にはツツコミ厳禁！

だけど、二人を抱えてる分、いつもより速度が落ちてるため、混合部隊から逃げ切れずに、ただ今一周200メートルのトラック、九周目に突入しました。

後ろを向いてるんだから、混合部隊に威嚇射撃でもしてほしいが、頼んだら『一般人には撃たない』と声を合わせて言われた。

…じゃあ、いつも狙われてた僕は超人やサイ○人の部類に思われるのか？

いろいろ文句はあるけど、こんな状況で分かったことがある…

まず、アヤさんにファンクラブがあったこと（教師中心）。たぶん、類い稀なる容姿と無口ゆえのミステリアスな雰囲気が人気の理由だろう。

あと、この生徒と教師は、興奮すると猪突猛進で周りが見えなくなるらしい。さっきから、古典的な挟み撃ちもしないで、ただ集団で追っ掛けてきている。

そして、やっぱりアヤさんの方が腕に当たる感覚が大きい…

「…ありがとう、うれしい」

「アヤさん、人の心を読むのはやめましょう。プライベートの意味がなくなります。あと、サキは銃口を僕に向けるな」

まあ、身長が同じぐらいで、胸もちゃんとあるのにサキのほづが軽…

「うん…カケル、ほめてくれてありがとうね」

「サキ、お前も読心すんな！ てか、姉妹揃ってなんでそんなスキル持ってんの！？ …あとアヤさん、僕に向けたナイフをしまってください」

『クツソ！ 羨ましいぞ伊達！』×いっぱい

「凶器向けられてるのがそんなに羨ましいのか！？ なら渡してやるよ…」

僕は走りながら腕を開いて、二人を放す…

「って、二人とも放してくれませんか？」

「イヤよ！」

「…ヤだ」

二人は僕の首にしがみついで、離れてくれない。

二人の力は絞まらない程度だけど、さつきより密着した体…ちょっと、この双壁×2はヤバい。

『…伊達エエエエエ！！ 許さあああああん！！』 ×じつそり

「イヤ！ この二人は渡すから俺は助け…二人とも、絶対放さないから武器出すな」

首にぶら下がられてる状態だと走りにくいので、最初のように二人を両肩に抱えて、放さないように二人の腰の辺りをしっかりと掴む。

…………ポッ

「カケル、放したら絶対許さないんだから…」

「かーくん大胆…でも、うれしいよ」

「勘違いすんなあ！！ お前等離したら俺の命を手放すことになんだろが！！」

『伊達エエエエエエ！！』 ×もつそり

…さて、なぜ僕がこんな目にあってるかというと、昨日の夜から今までの時間に原因がある。

回想VTR準備OK？ …じゃあ、回想行ってみよッ！！

「はあ〜」
ため息をはく僕は、髪を縛った黒い紐をほどく。

…髪は縛れるぐらいに切る。

僕は疲れた体を引きずり、そんなことを考えながら、自分の家の前まで帰ってきた。

僕の家は、両親が残してくれた数少ないものの一つで、質素ながら機能的な庭付き一戸建の物件だ。

二階建の家は部屋も五、六部屋あるため、学生に部屋を貸して生活費を稼いでたりする。

去年まで大学生三人が住んでたけど、卒業して独り立ちしてった。

そのため、今は広い家に一人寂しく…

ニヤア〜

鳴き声を聞いて、見た足元には黒猫が座っていた。

いちよう言つとくけど、行く先でよく現れるこの黒猫はノラ猫だ。僕はこいつを飼う気もないし、拒否するつもりもない。

…けど、こいつがいるから寂しくないかな。

僕は家の鍵を開け、黒猫と家に入って…

「かーくん、おかえり」

その声を聞いた時に、僕は急速に眠くなり、そのまま意識を手放した。

目が覚めた僕は、いつも通りのベットの上で、見慣れた自室の天井と、見慣れた人を見ていた。

「…アヤさん、合鍵でもピッキングでも構いませんが、勝手に家にあがって、帰ってきた人を薬で眠らせるのはやめてください」

僕の寝てる脇には、無表情のアヤさんが座っていた。

「かーくん、そうでもしないと、けがの治療、させてくれない」

「えっ…治療？」

そういわれ、上半身を立たせて刺された自分の左腕を見ると、腕には白い包帯が巻かれていた。

「左腕、四針、二発。右肩、一発。右下腹部、一発。左太股、一発…全部縫って、弾も取った」

…確かに、傷を受けた所すべてを治療したみたいだ。僕としては、勝手に治されたのは少し心外だった。

「…でも、アヤさん。普通、手術なんて出来な…ッ!？」

僕の質問の言葉は、アヤさんが抱きついてきて押し倒されたことで強制的に途切れた。

「アッ、アヤさん!？ どうしたんです!？」

アヤさんの顔は、真横にあるから見えないけど、その体はひどく震えてた。

「…二年前、あの時から、勉強したの」

「えっ…」

顔を上げたアヤさんの頬には、一筋の涙が流れていた。

「かーくん、命懸けで、私達守って、けがする」

涙が溢れるその瞳は、強い意志が含まれていた。

「私、かーくんの、傷ついてる…姿、見たくない。だから…私、かーくんのけが、治す。…だから、保険医に…なって、勉強もした…んだよ」

…アヤさんは元々、凄腕の医師だった。

二年前、いきなり保険医になると聞いた時は、彼女の自身の心の傷のせいだと思ってた…
だけど…違かったんだ…

「アヤさん…ありがとう」

僕は感謝の言葉と共に、アヤさんの涙を指で拭き取る。

そんな僕に、アヤさんはいつもは見せない最上級の笑みを浮かべていた。

…この至近距離でこの笑顔は反則だろ。

犯罪者でも、この笑みの前じゃきつと何も出来なくなる。

い、いかん！ 他のことを考えなければいろんな意味でヤバイ…

…そついえばアヤさん、いつもと違う…!?

「アヤさん…しゃべり方少し治ったんじゃないですか？」

今日の午後まで、語尾に『の』とか『だよ』とかつけてなかった。

僕の言葉に驚いた顔したアヤさんは、徐々に抱き締める力を強くし

ながら、うつむいた顔が赤くなっていた。
言っちゃ悪かったか？…

「…くんと……した、から…」

「えっ？ なんですか？」

そう言った僕に、うつむいてたはずのアヤさんの顔がいきなり近づいて…！？

僕の唇に一瞬、甘く柔らかな温もりがふれる。

いきなりの事に僕は固まってしまい、さっきより顔を真っ赤にしたアヤさんは、僕の耳をおしゃぶりのようにハムハムと甘噛みしていた。

しばらくして、アヤさんが甘噛みをやめて僕から離れようとした時に「これで、二回目。かーくん、寝てる時に…キス、したの。…だからだよ」

とささやかれた瞬間、心臓の鼓動がピークに達し、僕の意識はバズ・ライトイオーと共に、宇宙の彼方に飛んでいった…

目が覚めた僕は、いつも通りのベッドの上で、見慣れた自室の天井を見ていた。

部屋の小窓からは暖かな朝日が差し込む。

どうやら、昨日は過労のせいで煩惱が僕にアブナイ夢を見せたようだ。

「よかった…簡単な夢才子で」

僕はあり得ない夢から覚めたダルい体を起こし……!?

寝起きボーとして気付かなかった…包帯を巻かれていた僕の右腕には…

「…………ふぁーくん…んツ…ハムハム……」

床に座りながら器用に寝ているアヤさんが、僕の腕を抱き締めながら、その指をしゃぶってました…

そっぴや、昔のアヤさんって年上とは思えないほど甘えん坊だったけ…

いつもは大人びてるけど…昔と変わんないな。

…つつか、エロいだろこれ…

それに、そうやってしゃぶられてると、なぜか耳に違和感が…

「あはははは…、あれって夢だよね？ …早く学校行こ」

完全に眠気の覚めた僕は、なんとかアヤさんから脱出し、いちよう彼女の朝食と

「教師は遅刻厳禁」と書いた置き手紙を残してから、登校という現実逃避を実行した。

えっ！ 残りのVTRはまだ準備中？ 次回まで逃げ切れ！？

作者の横暴だ！ 職権濫用だ！ トラック二十周目に突入だ馬鹿野郎！！

…と文句は言ったけど、1000ヒット記念もあるし、今回だけは百周でも千周でも走って逃げ切ってやるよ！

けど…

「アヤ姉、どうだったの？」

「かーくんの、朝ご飯、美味しかったよ」

「…今度、食べさせてもらおう…って違うー!! さっきのって夢オチ
!?!? それとも本当なの!?!?」

……………ポツ

「…教えない」

『クソオオオオオオオオ!!!!』 ×こんもり

ああ、神よ。1000ヒット記念に、嘘でもいいから…夢オチと言
つてくれえええ!!!

神様…[…………ちゅあ?]

最終話前編、特別部隊と天使の悪戯（後書き）

作者「1000ヒット記念だ。最終話までは生かしてやるっ…」

最終話中編、戦女神の純粹な涙（前書き）

最終話は、前編 後編の予定が、葬式等の私事のせいで前編 中編 後編になりました…

最終話中編、戦女神の純粹な涙

……ハッ！！

やっとVTRの準備出来たか！

てか遅いわ！！

82周したわボケ！！

…まあ、追跡してくる方も次々脱落してって、今残ってるのは、ムサイ体育教師数名と肉体派親衛隊で執念深いのが数十人と減ってきた。(先陣は田中)

その間に、サキは人の上で暴れるわ、アヤさんは昨日見た夢の内容をやけに詳しく話してるし…

「手術、終わったら、ガマン、できなくて…それが一回目」

「カケケケル！！ 手術後すぐに…いや、手術中に起きなさいよ！！」

「いや！！ 薬で眠らされてたんだから無理だろ！！ てかアヤさん、それはきつと夢です！ 定番夢才子です！！」

「…かーくん。事実から、逃げちゃ、ダメ。…それとも、私との、キス…イヤ？」

担いでるから顔は見えないけど、アヤさんの小さな声が、切なそうに聞こえて…

「べ、べつにイヤとは言ってますよ。…むしろ、アヤさん綺麗だし、優しいし、昨日辺りからやけに色っぽいし…そして、サキはトカレフをしまえ」

つたく、何でサキはアヤさんをほめてるだけなのに、銃口を向けてくるんだ？

「だってカケル、アヤ姉ばっかほめて…私だって…ほ…しい…」
「はいはい、文句は後にしてくれ。それより、そろそろ鬼ごっこを終わらせよう」

日も暮れてきた。

もう、このイタチごっこを終わらせたい。

「僕が降ろしたら二人とも学校側に走れ」

「かーくん、は？」

そりゃもちろん。

「僕は校門に走って奴らを引きつけ…」
「ダメ!!」

全部言う前にサキに拒否されました…

「つて、なんでダメ!? 野郎共は僕についてくるから、絶対安全だぞ?」

これは今出来る一番最良の方法だ。
それをなんで否定する?

「一緒にいる…そう『約束』したでしょ」

…… ったく、しゃあねえな。

「…じゃあサキ、僕の右ポケットに黒い皮紐がある。その紐で僕の後ろ髪を縛ってくれないか?」

「…たく……あつた」

サキは、ブツブツ言いながら僕の右ポケットから紐を出したみたいだけど、髪を縛る様子はない。

「おいサキ! さつさと…」

「…縛る理由は? 私のメリットは?」

…おいおい、読者も分かるようになことに説明が必要なのか?

「これから『新月』を使ってスピードを上げ校内から脱出。それでも追ってくる奴等には、気配を消して帰宅ラッシュ&夕方バーゲンの集団に紛れ込んで撒く」

三十六の兵法なんかより、結局は逃げるのが一番なんだよ!!

それにこれならサキとの『約束は』守れる。
後はサキを納得させるメリット…

「…逃げ切った後に、お前の言うこと、実現可能な一つだけ聞く。
ただし『死ぬ』や『逝け』は人道的に無理だからな」

「かーくん、私も…」

「分かった分かった！ とにかくここから逃げ切れりゃいいー！」

僕が今出せる最高の交渉カード×二枚を提示した！
相手方の答えは……

「…わかったわ。男なんだから約束は守りなさいよ」

ウツシャ！ 交渉成功！！

どんなこと言われるか分かんないけど、実現可能な範囲ならなんとかなるだろ。

「無論だ、じゃあ次のVTRが終わるまでに頼む」

「しょうがないわね。じゃあ、まかせなさい！」

んじゃ、授業とかは解説でチャツチャと終わらして、放課後からの
回想VTR第二段スタート！

アヤさんを置いて学校に行った僕は、サキの強襲もなく、アヤさんに会うこともなく、僕は珍しく平凡な学生生活を過ごしていた。

しいて言うなら、レイに

「己で平凡が珍しいと言っている時点で末期だ」

と宣告され、ヒカルに

「あれが『新月の黒猫』なら、いつものカケルは『月下の金鶏』って感じちゃう？」

と、格好良く『チキン』と言われたぐらいかな。…ぐすっ（泣

二人には散々に言われたけど、情報提供者のレイと、最後までサキを送ってくれたヒカルに感謝していた。

（レイは警察への通報や、スキンヘッド野郎の処理をしてくれたらしい）

そんなこんなで授業を終えた僕は、放課後に田口さん（基本装備・国語辞典）の放送で生徒会室に呼び出されていた。

でもなんで？ 俺は生徒会に所属してないし、生徒会に喧嘩を売った記憶も買った思い出もない。

…まあ、入れば分かるだろ。

僕は高級感漂うドアを二度ノックをして、『どうぞ』の言葉も聞かずにドアを開け、そのまま生徒会室に入る。

部屋の中は教室二つ分ほどあり、その中心には、大手企業の重役達が会議をするような机と椅子が、独特の雰囲気醸し出しながら設置されていた。

そう、僕が財閥にいた頃に見た部屋とそっくり…

「珍しいじゃない、アンタが私に後ろを取られるなんてさ」

「なっ！？ なんでお前がここに！？」

後ろからの声に驚いて振り向くと、そこには…

「生徒会長が生徒会室にいる…普通のことですよ」

目の前にいるのは、栗色のポニーテールの強気少女。

…忘れてた。

サキが生徒会長だったことを…

「まあ、座りなよ」

僕はサキに勧められた通り、いくつもある椅子のドアに一番近い一
つに座って、背もたれに寄り掛かる。

サキは椅子には座らず、僕の近くの机に足を組んで座った。

生徒会長がそんなことしていいのかよ…って校内で射撃してるやつ
に言うことじゃねえな。

「でカケル、私が今日あなたを呼び出したのは他でもない……昨日
のあなたはなに？」

……完全に私事で生徒会長の名前使ったな、おい。

「まあ、あれを見たからにはお前にも知る権利はあるな……」

僕はサキに新月や四谷財閥にいた頃のこと、二年前の事件について
カクカクシカジカ話した。

「ふうん、だからカクカクシカジカだったのね」

「…ちゃんと納得してるならそれでいい」
カクカクシカジカで分かったのか…？

「で、部屋に入ったときの質問だけど…いつもの俺は新月と違って、殺気とか敵意、武器の威圧感を感じて逃げてるんだ」

ま、この殺気感知スキルと超高速の逃げ足はサキに追い掛けられて身につけたものだけだな…

「今日のお前は武器も持ってないし殺気を感じなかった。だから、全然分からなかった」

「…なるほどね」

…遠回しに『いつも殺気出してる』って言ったのに納得した!？

ならストレートに言ってみるか…

「まあ、お前が僕に殺気を向けないなんて…ツチノコ捕まえるくらい珍しいな」

「……………」

サキは黙って俯いてしまった。

…やっぱ怒った？

「んじゃ、話も終わったことですし、僕は帰らせて頂きま…っ痛てええええええ!!」

この部屋から逃げ出そうと思った僕は、サキに左腕の切り傷を思いっきり掴まれて、その痛みに絶叫した。

「お前、なにすんぎゃあああああ!!」

今度は左腕の傷を掴まれて、激痛に顔と声を歪めた。

な、なんでそう的確に傷口を掴むかな…

「…バカ……全身ケガしてるクセに無理してんじやないわよ……」

「なっ、なんで知ってる!? ……ってそれっ!?」

俯いたままのサキが片手を掴むのをやめて、ポケットから出した携帯には

『かーくんはケガしてる。かーくんは平気そうな顔してるけど、普通なら動けないケガ。無理させないで』

と書いてあるメールがあった。

…送信者は聞かなくても分かるでしょ?

ブベエッ!? 〓サキが僕の腹部にタツケル。

ドゴン! 〓勢いのままドアに激突。

ビキッ! 〓ドアの金具が破壊。

バゴーン!! 〓ドアを破壊して、二人とも廊下に飛び出す。

チュドーン!! 〓!!!?

はっきり言ってケガ人に無理させてるってこれ。

…ええ、そして僕はヤバイ状態になっています。
なにせ、僕はサキに馬乗り…プロレスで絶対有利のマウントポジシ
ョンを取られてるんですよ。

ああ、これから殴られたり、首絞められたり

「…バカッ!!」

そうそう、バカって言われたり

「…私達守っても…自分が死んだらどうすんのよ!?!」

うんうん、僕の覚悟に文句言われたり。

「このバカア……………」

黙りこんで泣きだしたりしてね………って!?

「サキどうした!?!? なんで泣いてん…ッ!?!?」

サキは、その泣き顔を見てかなりテンパってた僕に、倒れこむように抱きついてきた。

「…グス……カケルう……一緒にいてよ……もう……いなくなんない
でよぉ……ずっと……ずっとそばにいてよぉ……」

僕に抱きついたサキの体は、小刻みに震えていた。

サキは、いつもみんなの先頭に立っていた。

自分が泣きたくても我慢して、泣いても人には見せない。

そんな強気な彼女は、人に涙を見せず、ただひたすら突っ走ってきた。

だけど、僕は彼女の涙を二回だけ見た。

最初は…僕が両親をなくして、みんなから離れようとしてた時。

次が今、彼女は目の前で大泣きしている。

そして、サキは一度涙を流すと、我慢してた反動でアヤさんよりも甘えるようになる。

てか、姉妹揃って抱きつく泣くパターンかよ。

…昔から弱いんだよな、その組み合わせには。

「……カケルはあ…楯なんかじゃあないよお…カケルはカケルなんだからあ…グス…そんなこと言わないで…」

サキの嗚咽が大きくなるほど、僕の体を締め付ける力が徐々に強くなる。

締めつけ&ドアに全身を強打したせいで、全身の傷が痛い。

傷、開いたかも…でも、新しい弾痕だらけの高校生が病院には行けねえよな…

朝のことがあるから会いづらいけど…後で保健室行こ。

今は…しばらくはこのままでいてやるか。

「分かった。でも、話す前に…泣きたいだけ泣きな。…いなくなったりしないからな」

僕はサキの頭を撫でながら、その涙が尽きるまで痛みに耐えることにした。

……痛たたた

最終話中編、戦女神の純粹な涙（後書き）

作者「ジーン軍伝統必殺奥義…」

カケル「…！！ 空が！ 空が落ちてくる！？」

作者「コロニー落し…いいいいいい！！！！」

カケル「ニュータイプは伊達じゃない…って俺は伊達カケルだ…ギ
ヤアアアアアアアア！！！！」

作者「悲しいけど…これって戦争なのよね」

ガンダムネタです。知らない人マジでスイマセン（汗

最終話中編2、過去のオレの誓い（前書き）

最終話が四編構成なんて…てか、最終話といえるのか？…
後書きにこれからの私に影響することを発表しますんで、興味があれば見てくださいm（――）m

最終話中編 2、過去のオレの誓い

俺は放課後の教室から、グラウンドでおこっているカケルの逃走劇を見ていた。

「なあ〜レイ」

「…なんだ？」

そして、隣には定番化したヒカルがいた。

「『月下の金鶏』って『新月の黒猫』みたいに、なにか意味あるん？」

「ああ、それか」

その呼び名は今日、ヒカルがカケルに言っていたが、それは昨日俺が気分でつけた通常時のカケルの別名である。

「ある国では金の鳥は『太陽』を意味する。太陽と月が二つあると、周りも明るくなるだろ」

カケルは周囲の人を時に見守り、時に楽しませる。

実際、カケルの逃走劇を見て笑ってる生徒は多い。

「…本当はその鳥は『ヤタガラス』というものなのだが、カケルには鶏のほつが似合う。だから『月下の金鶏』」

少しぐらい皮肉を入れてた方が、カケルにはあうだろう。

「なるほどなあ」

ヒカルも納得したように明るく笑っていた。

…ああ、忘れていた。

前回中途半端に終わった、カケルの回想の続きを開始しよう。

サキが泣きつき始めて約一時間、僕の脳内では「煩惱VS理性」の対戦カードが組まれていた。

まあ、「激痛」がその死闘に殴り込んで圧勝しましたけどね（涙

てか、そんなに力入れて抱き締めなくてもいいだろ。

「かーくん、終わったよ」

そう、今まで僕は保健室の椅子に座って、アヤさんの治療を受けてました。

前回、サキに掴まれたり突撃されたりされたせいで、やっぱり傷口が開いちちゃったんですよ。

その治療の間、二年前、僕が深く関わっていたことを知らなかったはずのサキが、同じ時期に攻撃の手を緩めたのは、僕の動きが鈍くなったのを感じ、無意識に緩和してるみたい……ってことを教えてもらった。

確かに、昔はずっと後ろ髪を縛ってたから、危ない時に黒猫の能力を発動して回避してた。

けど、二年前に黒猫は『俺』と共に封印したから、自動的に身体能力も下がっていた。

でも、なぜ見抜けたんだろうと考えると

「サキは、かーくんのこと、よく見てるから」

と、アヤさんが俯きながら言っていた。

そりゃ、毎日のように狩るつとしてる相手はよく見てるだろうからな。

それにしても…一話目にも思ったけどさ、緩和するならやめてほしいわ…

「色々ありがとございました…じゃあ、僕は帰ります」

「えっ…サキは、どうするの?」

「いや、寝させといてください…昨日のことで、きつと疲れてるだろうから」

そう、僕の傷口が開いた原因を作ったサキは、子供のように泣きながら寝たため、保健室のベットに寝かしました。

サキを運ぶ時に、誰とも会わずにすんだのは運がよかった。

…親衛隊にでも知れたら、即極刑決定だろうからな。

治療中上半身裸だった僕が、制服を着直して、立ち上がるうとした時、アヤさんに裾の端を掴まれた。

「ダメだよ。サキ、起きた時、かーくんいないと、泣き出して、私には、止められないよ」

……なぜ？

俺は特撮映画によくある『目覚めた怪獣の怒りを静める少年』のようなスキルは身につけてないはずなんだけどな…

「…まあ、僕がいなきゃいけない理由はわかりませんが、アヤさんに迷惑はかけられません。だからと言って、今すぐ起こすのも可哀想だし、サキが自然に起きるまでは、ここにいさせてもらいます」

僕が椅子に座ると、アキさんが机の引き出しからお茶菓子を出して紅茶をいれてくれた。

…ダージリンの缶と一緒に『トリカブト』って書いてある缶が入ってたような気がしたけど…見なかったことにしよう…

「かーくん、今日みたいに、サキ泣かして…あの時は、私達の家、連れてきてた」

そう、あの時は『あの男』にあることを言うためにも、アヤさん達の家（＝四谷財閥の豪邸）に行った。

「そんなこともありましたねえ…あの日がなければ今の僕はいませんね」

「……そんなに、特別なこと、あった？」

そうか、あのことはレイでも知らない…僕とサキしか知らないこと
だろうな。

「サキが起きるまでしばらく暇ですし、お茶でもしながら、僕の昔
話をしましょう…」

僕は、アキさんからもらった紅茶を一口飲んでから、話し始めるこ
とにした。

…過去の『オレ』が立てた『誓い』と、そのきっかけとなった出来
事を…

人気のない小学校の屋上

空を染める、赤くかがやく夕日

オレは…夕日が沈んだら、不要なものを捨てようと思う

オレは、オレを拾った男に言われた。

『これから一週間以内に、命に代えても守りたい大切なものを見つ
ける。さもなければ、お前をニューハーフにする!!』

…それがイヤだったオレは大切なものを探していた。

けど、見つかるわけなかった。

どんなものでも、いつかは消えてなくなる…まるで両親のようだった。

オレは……そんなのいらない。

なくなるんなら、最初から持たなきゃいい。

…こんな、黒い血が染みついた手に持てるものはないのかも。

いや、オレの命も…本当はいらないのかもしれない。

両親も、友達も…オレを必要としてくれる人はだれもない。
だから、俺が死んでも悲しむ人はいない。
オレが死んで流されるの涙は、悲しみじゃなくて哀れみの涙。

…あの男は、オレに教えたかったのだろう。

『大切なものがない、必要とされないオレに生きる必要はない』と
いうことを。

今、オレがいる学校の屋上は『立入禁止』ってなってるから、一部
フェンスがコワれたままになって、そこに歩いて行けばすぐに四
階下のコンクリートの地面にまっしぐらだ。

そして『立入禁止』に入るのは、オレにとっては朝飯前…っても今
は死ぬ前か。

そう、今日はその一週間の最後日。

オレはこの屋上で不要なもの…オレを捨てることにした。

「…あなた、なんでここにいるのよ」

その透き通った声に振り返ると、栗色のポニーテールの強気な顔をした女。

あの男の娘の一人…四谷サキがいた。

この女は、すべてを突き放したオレに、涙目でビンタを食らわさせてから、いちいちオレに突っ掛かってくる。

「かみ型が似てる」と言っつて殴りかかってきたこともある。

「お前こそ、なんでいる？」

「あなたがここに来んのを見たからよ」

ああ、ここに来た時感じたのは四谷だったか…
全然気にしなかったけど。

「お前には関係ない」

そう、オレがなにしようがオレ以外には関係ない。

「…自殺でもする気？」

女の感って鋭いもんだな。

それでもなきや、今のオレは相当自殺したい人の顔になってるんだろっな。

「…だったら、どうする？」

「止めるわよ！！」

「……こっぴつヤツはキラいだ。

真つすぎすぎるこいつの目は、同じ目をしてた過去のオレ自身の無力さを思い出させる。

「なんで？ お前がオレを止める理由はあるのか？ ないだろ？」

だれにも必要とされないコワれた人形が、捨てられるのを止める理由がよ！！」

「……………」

これが人としてまちがってても、だれもオレを止めないだろう。

…こわれたものは、だれも必要としないから。

「じゃあ、明日はオレのおかげで学校休めると思っよ」

…ちょうど、明日金曜日だから三連休になるな。
そんなことを考えてたら夕日が沈みはじめたので、オレはコワれた
フェンスの方に歩きます。

「……………バカアアアアアアアアアア！」

あと数メートルぐらいのところまで、後ろから近づいて来る声。

ただの体当たりで、オレは振り向かず横によける。

「…ジャマすんな…って!!！」

四谷が横を通りすぎた時、オレは気づいた。
このままだと…

四谷が落ちる。

オレの口は、四谷のくちびるでふさがれてしまったから。

少しして、はなれた四谷の顔には、たしかに涙が流れていた。

「……バカ…必要だよ」

なにを言っている？

「…さつきも、私を…助けてくれたじゃん」

オレは…なんでこいつのために動いた？

「私は…あなたが死んだら…悲しいよ…」

なんで、悲しむんだ？

「…オレは、コワれた人形…ッ!？」

オレがフリーズした頭で、必死に出した言葉は、オレの首に手を回して抱きついてきた四谷によってかき消された。

「…あなたは…人形なんかじゃない…あなたは…カケルは…私

が…必要としてるよ……だからあ……もう……いなくならないでよお……」

心がいたい。

ヤケドのようなヒリヒリしたいたみ。

それは、彼女の涙の熱が伝わって、心のおくに染み入るよう。

その熱がオレの心を満たした時、オレは分かった。

オレは…オレを必要としてくれる、こいつに泣いてほしくない。

「もう、泣くなって」

キズついてほしくない。

だから、こいつが落ちそうになったら、かってに足が動いた。

「もう、消えようなんてしないから」

「…ほん…と…？」

オレを抱きしめる力が、少し強くなる。

「ああ、…見つかったからな」

……守りたい。

大切なものが、いつかなくなると分かっても…

「捨てる気だったこの命、その使い道を見つけたんだよ」

オレの命に代えても…オレは大切なものを守る。

「…って、こいつネてるし」

オレに抱きつきながらネてしまった四谷を、オレは四谷の家でもあ
る、あの男の居場所におぶって運んだ。

その家に着いたとき、オレは男に四谷を渡しながら言った。

「オレの命に代えても守りたい、大切なものは…オレを必要としてくれる、オレの周りにいてくれる人全員だ」

「お前も知ってるだろう、大切なものを失うのは悲しい。…お前は、大切なものが消え去ることに耐えられるか？ お前は多くを望むが、そのすべてを守れるか？」

男の言葉は、なにもまちがってない。

…でも、それがどうした？

「オレは、オレの周りにいてくれる人が、笑ってくれればそれでいい。そいつらを泣かせるヤツがいたら、オレは全力で立ち向かう」

まちがってても、かまわない

「いつ消えるとかは関係ない。オレは大切なものの笑顔を守りたいだけ…そのためなら、どんなことでもしてやる…」

でも、オレは守りたい

「だけど、今のオレじゃあ、一人の笑顔を守ることも、ムリかもしれない……」

この血に染まった手で、なにが出来るかなんて分からない

「……だから、オレ自身がオレの周りにいる人全員を守る『タテ』になる！……それがオレの答え、変えたりはしない」

それでも、オレは立ち向かう

大切なものを守るため

……そう『誓った』から

オレの言葉を聞いた男は、これでもかとニヤけた。

「一番厳しく、一番傲慢な選択をしたな……60点、ギリギリ合格の答えだ」

そして、男はオレを指差す。

「お前の『朔望月相』の力を、お前の大切なものを守れる力に変える技術：今日から俺がそのすべてを叩き込んでやる。残り40点はそれから見つける」

「ハイ！」

オレはすぐに返事をした。

今日泣かせた彼女を、早く笑わせたい思いに、迷いなんて一つもないから…

最終話中編2、過去のオレの誓い（後書き）

意外に読者数も伸びた《逃走者！》。

ですが、評価で『展開が速すぎ』みたいなことを指摘されました。

……実際それが作者の悩みの種だったりします。

なので、読者の皆さんの意見を聴いて、展開ゆっくりな続編を書いてみたいなあ〜なんて思ってます。

候補としてはバトル系、ハーレム系、短篇的コメディ系、などがあります。

もちろん、他のアイデアも、出た時点で最有力候補です

もし、『違う作品のほうがいい』と思う方は評価・感想のどこかにを入れてください。

読者様方の意見が私の小説を変えます。 正直、マジ必死です（

涙

最終話後編、やっぱり僕は逃走者！！（前書き）

今まで有難うございました！！現在1668HIT 続編は読者の
感想等によって変わります！！

最終話後編、やっぱり僕は逃走者！！

「…これが昔、無茶な誓いをしたバカな少年の話です」

我ながら本当に無茶な誓いだっと思ったと思う。

でもあれから僕は、あの男：四谷源蔵に四谷財閥の隠密として、様々なことを学び、大切なものを『守る力』を手に入れた。

でも二年前、僕はアヤさんを守り切れなかった。

アヤさんは事件からしばらくは、笑わなくなってしまった。

自分の無力さを感じた僕は『俺』と一緒に『守る力』を封印した。

だから、これは一度は諦めようとした誓い。

だけど、これは諦めきれなかった誓い。

「…サキ…かーくんのファースト…くやしい…」

アヤさんが、なんか場違いなコト言ってるみたいだけど、よく聞き取れない。

いったいどうしたんだ？

「…カケル!？」

いきなり名前を呼ばれ、その方を見ると、さっきまでベッドで寝ていたサキが、上半身を起こしてこっちを見ていた。

「おお、起きたか……?？」

サキの瞳にみるみる涙が溜まってく…

こ、これは！ 2回中2回の確率でタツクルのモーション!？

僕は一番近い出口…グラウンドに出られる窓に向かって走る。

校長よ…窓ガラスの一枚ぐらいいは許してくれ。

…でも、このまま逃げるとサキは割れた窓にぶつかるとかも…

…しょうがない。

僕は一か八か、サキを信じて振り返る。

「サキ！ 止まれるなら止まッ……ブベッ！！」

願いもむなしく、僕はサキと一緒にガラスを割って、グラウンドに飛び出ることになった。

運良く、二人とも怪我せず着地できた。

…僕がサキを押し倒す形で…！？

「ス、スマン！！ 今すぐ退く…って、サキさん？ 手を放してくれないと退けない、ってか動けないんですけど…？」

僕は急いで立ち上がろうとするけど、サキの顔の横にある僕の右腕は白い手に掴まれて、僕の首には同じような腕が回されていた。

「…カケル、黙って私の話を聞きなさい」

本当に目の前にあるサキの顔は、涙を見せながらも、生徒会長としての顔よりも真剣だった。

その真剣さは、僕に小さく首を縦に振らせた。

「私は…あんたを認めない」

いきなり否定かよ

「今も昔も…変わったように見えても、結局はあんたはみんなから距離を置いて逃げてるだけよ」

…そうかもしれない

「さつき、あんたは私達を『守る』ために『楯』になっただけってたわよね？」

さっきの話、聞いてたのか…

「…でもね、私は『楯』なんか無機質なものを追い掛けるなんてしない」

…僕を追いかけてんじゃないか

「私が追い掛けているのは『伊達カケル』って、逃げ足だけが取り柄のチキン野郎よ！」

ずいぶんと言ってくれるな

…否定は出来ねえけど

「でもね、そいつはやけに足が速くて…私じゃ追いつけないのよ」

…なに言ってるんだ？

「だから…『楯』なんてふざけたこと言っていないで…こっちに来なさいよ…」

……

「私達から…離れてる『楯』のあんたじゃ…私は…笑えない」

…笑ってくれよ

「…あんたが…傷ついて…るのに…私は…笑え…ないよ…」

…お願いだから

「だから…近くにいて…私の手が…あんたに…届くように…」

…黙ってられんねえ

「そしたら、僕はお前達を傷つけるかもしれないねえだろ！」

僕は、僕のでみんなが傷つく…それが怖かった…

「…私はそんな…弱くないよ…？ みんなも…簡単に…あなたの周りから…いなくなったりしない…よ？」

…でも本当は、僕が守り切れなかったら、みんなが周りからいなくなるんじゃないかって…それが怖かった

サキのやさしい言葉が、触れる手が、真っすぐな瞳が、その恐怖をすべて拭い去ってくれる気がした

…だけど

「…僕は誓ったんだ…命をかけて。それをそう簡単には曲げられない」

それは諦めても諦めきれない…それほど強く刻まれたもの…

…でも、今は亡き硬派な昔気質かたぎの父親が言っていた。

『誓いや目標などは、一人でも立てられるもの…』

「だったら…約束しよ…？」

『だが約束は違う。約束には相手がいて、その相手を信じなければいけない』

「…カケルは…これからも…私たちを守…って…けど…近くにいて……そしたら私…この手…放さない……から…」

サキの震える手の力が少し強くなり、その言葉の意志を強く感じさせる。

『だから、約束は大切なのだ。必ず守らなければならない』

『…たとえ相手が約束を破っても、お前ははその相手を一度信じたのだ』

『信じたのなら、お前は意地でもその約束を守り通しなさい』

硬派の父親らしい、子供には固すぎる言葉。

幼い頃の僕には、『約束は守る』としか理解出来なかった。

…でも、今なら分かる気がする。

この約束をしなければ、僕は『楯』のまま、ただ敵だけを見て歩いていけるだろう。

みんなの悲しむ顔から顔を背けることが出来る。

見ないこと…それで弱い僕はいろんなことに堪えられた。いわば僕が『楯』になれる魔法。

けど、それは《オレ》が僕にかけた呪い。
自分自身が傷つかないよう、高くそびえ立つ城壁。

僕が、今立っている位置から逃げないようにするための鎖。

過去の《オレ》…

もう、呪縛を解いていいかな？

もう、恐がらなくていいかな？

もう、ここから逃げていいかな？

…みんなと一緒にいていいかな？

嘘が嫌いで、どんな人にも明るく接するヒカル

言動は怪しいけど、本当はかなり頼りになるレイ

綺麗でしっかり者だけど、時々暴走するアヤさん

マジ怖いけど、最初に手を差し伸べてくれたサキ

僕はみんなと一緒にいたい。

そして、みんなを守りたい。

もちろん、この命をかけて。

これは『誓い』じゃなくて『オレ』との『約束』。

僕は『オレ』が決めた通り、『命に代えても大切なもの（みんな）を守る』

だけど僕は、僕のままです…みんなの近くで守り続ける。

僕は…みんなといれば強くなれる気がするから。

ちょっと形は違うけど、『オレ』の誓い、ちゃんと果たすよ。

「勝手にしろ……っえ!？」

僕の口から、言う気の無い言葉が出てきた。

まるで、《オレ》が僕に答えてくれたように……

…でも、答えも時と場合を考えてくれ。

目の前のサキが、涙も止めて驚いた顔してるぞ!

「…約束…してくれるの…?」

「ん? ああ、約束してやるからこれ以上泣くな」

サキは『勝手にしろ』をYESの意味と取ったらしい。

…そう答えるつもりだったので、手間が省けた。

「じゃあ、そろそろその手を放してくれな…んッ!？」

僕が願いを言い切る前に、首の後ろに回されてたサキの腕に引き寄せられ、僕とサキの距離が唇が触れることで0になった。

それがキスだと理解した時には、僕の体は硬直してしまった。

触れているのは一瞬かも、十秒かも、一分かもしれないサキの唇は、昔同様僕を黙らせるのには絶対的な威力を誇っていた。

その唇が離れた時に、サキの顔には涙を吹き飛ばす、女神のような笑顔があった。

「…指切りの…代わりに……破ったら許さないわよ…」

少し赤くなったサキの笑み…

…この笑顔を消すようなこと、出来るわけねえよ

「…かーくん」

「ん？ …なんですかアヤツ…！？」

「…！！ ア、アヤ姉！？」

呼ばれた方を見た時には、いつのまにか横にいたアヤさんの唇に僕の唇が重なっていた。

さらに、アヤさんの舌が僕の口に侵入す…

「そうはさせない!!」

「…グビヤ!？」

侵入する寸前、サキは僕の首に回された腕を自分に引き寄せ、重なった唇を引き剥がす。

「…ゲホツ…サキ、ある意味助かった…って、アヤさん！ なにしようとしてんですか!？」

「私とも、約束ね」

サキに無理矢理離されたアヤさんは、そう言いながら僕の上に抱きついてきた。

てか、なんか上下の二人睨み合ってるんですけど…

「姉さんでも手加減しないわよ」

「…絶対、負けない」

…ああ、なんでこうなる？

誰でもいいからこの姉妹を止めてくれ…

「だ、伊達か？」

おお、神はオレを見捨ててなかったか！！

僕は二人を止めてくれそうな声の主（救世主）の方を向く。

隆起する筋肉、オッサン臭い顔、白いタンクトップに、首に掛けられたホイッスル…

そのは体育教師、田崎。

そして別名…

「魔王！？」

ヒーロー（救世主）じゃなくてラスボス（魔王）が出てきた！？

だが、今は魔王でも、スラムでも、ピッコロでも…誰でもいい！

「魔王…じゃなくて、先生！！ 助けてください！」

「ああ…」

魔王は笑顔で頷いた。

よかった…

つて、魔王の笑顔なんて、怒ってる時と下ネタ言ってる時しか見たことねえぞ。

それに、物凄い殺気が魔王の拳から、ヒシヒシと感じるんですけど…

「その代わりに伊達…死んでくれないか？」

そのお願いは教師として、おかしいだろおおおおお！？

「仕方ない…サキ、アヤさん…後ろに下がっててください」

僕は二人の束縛を解き、魔王の目の前に立つ。

「いい度胸だ、俺達の白衣の天使に触れた重罪。その身体で償って…」

「つたく、魔王は噂に聞く『四谷保健医ファンクラブ』の会員らしいな。」

「でも、確か奥さんいたよなこいつ…」

「ま、まあ、自分達のアイドルが、僕みたいのに抱きついてたら殴りたくなるかもな。」

「でも…」

「…イヤですよ」

「僕は魔王が拳を上げる前に、回れ右をする。」

「痛いのでイヤですから。…それに、僕は今から重罪を重ねさせてもらいます」

「そう言った後、僕はサキとアヤさんを両肩に担いで、魔王から逃げ出した。」

「魔王が『待てえ！』と言ってたが、待てと言われてナントカカント力はいない。」

「カケル！？ なにすんのよー！」

「か、かーくん？」

両肩に乗ってる二人の反応は新鮮で面白い。

「たく、さっき自分達が言ったことを忘れたのか？」

「…二人が原因で僕が逃げるんですから…約束通り、一緒にいて逃げて）もらいますよ」

そう言った時の僕の顔は、今まで生きてきた中で、ダントツ一番の笑顔だっただろう。

…この後、グラウンドを二人のアイドルを担いで走っていた、男子生徒を見つけた親衛隊&ファンクラブが、その生徒を死に物狂いで追いかけたのは言うまでもない。

作者の計画性の無さで、回想がクソ長くなってスイマセン。

僕はその間に黒猫になって全力で学校を脱出してましたよ。

最後まで残った、田中&魔王の最凶コンビからも逃げ切ったよコンニャロー!!!

…そんなこんなで僕等は今、人がほとんど来ない&ここらで一番星が綺麗に見える小高い丘に来て、三人並んで寝転がっていた。

僕が髪を縛った紐を解くと、体に痛みが走った。

「……アヤさん、後で治療お願いします」

「まかせて…私が手術するのは、かーくんのためだから」

さっきの痛みは走り回ったせいで、また傷口が開いたせいだ。面倒な手術を、左にいるアヤさんは笑顔で答えてくれた。

やっぱり、アヤさんは頼りになるなあ。

「カケルはアヤ姉ばっか頼るだから…」

右にいたサキがイジケでした。

てか、なんでサキがイジケるんだ？

「俺はサキも頼りにしてるぞ？ 僕の心境を一番最初に気づいて、いい方向に導いてくれるのは、いつもサキだから」

「！？ なななに言ってるのよ！？」

サキが騒ぎだしたけど、少し笑顔になったから結果オーライ。

僕は視線を夜空に向け、淡く光る満月を見ていた。

あっ！

「そう言えば二人共、今四谷家ではスナイパーライフルと欧米文化が流行ってるの？」

僕はこの頃の疑問を二人にぶつけた。

「「…??？」」

あれ？ そっじゃなかったの？

「だって、二人ともドラッグノフ持ってたし、約束にキスするなんて…なんか欧米っぽいじゃん？」

…カチッ

ん？

なんだ、この二人から聞こえた機械音…

まるで、巨大な地雷を二つ踏んだような…

「……………殺気！？」

僕は素早く立ち上がり、瞬間的に二人から距離を置く。

そして、二人を見ると…

「カア〜ケエ〜ルウウ〜？」

戦女神サキが持つてるのは…戦車の装甲さえ撃ち抜く威力を誇る、ブローニングM2重機関銃

「……………」

「「待てえええ!!！」」

目の前の地面が深く抉^{えく}れて、大木が何本も砕け散る。
傷口が痛む…でも、立ち止まれない。

一発でも食らったら三途の川の向こう側特急一直線のプラチナチケ
ットを押しつけられる。

でも…

なんでこおなるんだあああああああああ!?

「逃走者だから…これでタイトル通り」

「このクソ作者あああああ!!!!！」

僕は無理知な作者のシナリオに怒号しながら走り続ける。

僕はこれからも走り続ける。

体は逃げるために

心は離れてた距離を縮めるために

でも…

「この状況から助け…!!」

ドギヤアアアン!!!

暗闇を淡く照らす満月の下、少年の叫びは爆音にかき消された…

【 H E E N D 】

(彼は終わり)

「…僕は終わってねえ！！ てか、『』で文字を隠すなッ！！」

「…チエッ」

ケシケシ…

【THE END】
(じわじわ終)

レイノート（人物紹介）（前書き）

各事情により続編が決定したため、この話に出てきた主要人物五人をしっかりと紹介したいと思います！！

レイノート（人物紹介）

逃走者 伊達だて 駈カケル

戌神高校一年

身長：170前半

体重：50前半

外見：体格は細目。後ろ髪が縛れる程度の長さのボサボサのくせにしなやかな黒髪。暗闇で金色に輝く瞳

性格：・敵に背中を真つ先に向ける生粋のヘタレ。甲斐性、度胸、共にゼロ。

・そのくせ、ド級の鈍感スキルと驚異のフラグ発生率を誇る。

特記事項：・両親は既に他界

過去に両親を殺した人間を殺害後、四谷源三その事実を隠蔽してもらい、それ以来二年前まで四谷最強の男として名を馳せた。

・『朔望月相さくぼうげつそう』という、装備品で性格と能力スキルが変化する力を持つ。・二年前の事件からは一人称を変えないと『朔望月相』の力が発動しないように自分にロックをかけている。

・今回は隠密&格闘専門の『新月の黒猫』のみ登場。

追跡者 四谷彩貴よつや さき

戌神高校一年・生徒会長

身長：160後半

体重：???

外見：バランスのいいボディライン。腰まで伸びた栗色のポニテール。雪のように白く、細い手足。強い意志の籠もった黒い瞳。

性格：・積極的で攻撃的。

・いつもは生徒会長として生徒を引っ張り、思いやりと人望のある人材。

・世間でいう『ツンデレ』（本人全面否定）

特記事項：・四谷財閥の次女。・各銃火器等やビーム兵器までプロ級に扱える。

・過去に中学校校舎を半壊を三度、全壊一度させた。

・ファンクラブ有（会員数180以上）

追跡者 四谷彩よつや さき

戌神高校保健医

身長：160後半

体重：x x

外見：大人の女性の体。肩まで伸びた赤髪に、左前髪で片目を隠している。白衣標準装備。

性格：・おっとり+甘えん坊な性格。・人見知りするが、姉としてしっかりしている部分もある。

・世間でいう『不思議系』（ノーコメント）、駆には『犬系』（全面肯定）

特記事項：・二年前の事件によって、会話が少しぎこちない。

・読心術のスキルを持つ。

・彩貴と同様に兵器の扱いはプロ級。

・ファンクラブ有（会員数200弱）

傍観者 おのだ ヒカル 小野田光

戌神高校一年

身長：180前半

体重：60後半

外見：茶髪に染めた坊主頭。この笑顔は老若男女を魅了し、一部の男を危ない道に誘い込む。

性格：・明るいムードメイカー。

・大嫌いな嘘に対しては敏感。

特記事項：・なぜかエセ関西方言を喋る。

・基本的に運動能力・成績・才能は人並み以上（駆の脚力等は人知を超えているため論外）。

??者 和泉玲 いずみレイ

〇〇高校〇年

身長：個人情報漏洩を予防するため記載を自粛。

体重：上記と同理由により記載を自粛。

外見：モニタージュされる可能性を考慮し記載をせず。

性格：科学捜査班により分析されることは心外のため記載せず。

特記事項：著作権、人権、企業秘密等に関連しており、第一級重要極秘事項に指定。それにより此処への記載は不可である。

俺は見せていた手帳をゆっくりと閉じる。

「ミキよ、これでいいか？」

「姉妹の体重と君と情報があまりに少ないんですけど…」

「自らの情報を公開するなど愚の骨頂だ。サキと四谷姉の情報は…俺も命が欲しいからな」

「……成る程ね」

今俺は、作者と登場人物が直接交流できる真つ暗な特殊空間^{クロスワールド}。

今回、俺は続編を書こうとする作者のために俺の情報手帳の一部を公開した。

もちろん、本当はこれの約十七倍（一名に対して）の情報があるのだが、それを見せるわけではない。

「んで、このお礼は…」

「いらない。俺は面白いものを見ればいい」

「……和泉さん、実は一番腹グロいでしょ」

「なんならミキの情報をこの場で流そうか？」

「和泉玲大明神様まじデごめんナサイ」

ミキは俺の目の前に目にも留まらぬスピードで土下座してきた。

「…その腰の低さはカケルを超えるかもな」

「お褒めの言葉有り難く…」

「誉めてはない」

俺の言葉に、ミキは一度ため息を吐いて立ち上がる。

「この柵しがらみの多すぎる世を上手く簡単に渡るためには、プライドなんかドブに捨て、面子なんて粉々に踏み躪しって、腰砕けるまでへこへこ頭下げたほうが利口なんだよ」

「…ミキは今何才だ？」

「青春真っ盛りの16オツス」

「年齢偽称もいいところだな」

「イヤ、成分表示：事実100%の本音ですから」

…まあ、茶番はここまでにしておこう。

「俺から情報提供したんだ。しっかり書けよ」

「ん……多分」

「夷神酒。本名…」

「心血注ぎ誠心誠意を込めて書かせていただきます」

真っ暗な空間で手帳を広げた俺に、人知を超えた速度で土下座する作者…

…後先心配な作者だが、どうか応援してやってくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2621c/>

逃走者！！

2010年10月12日06時18分発行